

渚



鈴



百合

のその後



この物語はフィクションです。
登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません。
また無断転載・複製・複写を禁止します。

目次

渚のその後	2 P \
鈴のその後	40 P \
百合のその後	81 P \

渚のその後

カーテンが剥ぎ取られた窓からは気持ちの良い陽光が部屋を照らしていた。遮られるものがない昼下がりの陽光は、段ボールの山を遠慮なく照らしている。

俺はその眩しさに目を細めながらも、窓の外に広がる見慣れた街並みを見下ろしていた。

俺と友幸と渚の三人が子供の頃から生まれ育った街。

夏休みに入ると毎日のように三人で虫を取りに行った山。友幸が渚に告白した中学の校舎。渚が初めて子供を産んだ病院。

友幸と渚が夫婦として生活しているこの賃貸の部屋からは、全てを眼下に収める事が出来る。

瞼を閉じればそれらの記憶も昨日の事のように全てが鮮明に浮かんだ。誰の捕まえたカブトムシが一番大きいかを競った早朝の山中。告白される事を勘づいた渚が取った、普段とはかけ離れた慎ましい態度は今思い出しても笑えるし、豪胆な友幸が口から心臓を吐き出しそうな程緊張していた姿は後にも先にも一度きりだった。実際に渚が岬を産んだ時は、一家の大黒柱としての風格を纏いどっしりと構えていた。

そんな俺達の思い出が詰まった街から今日、友幸と渚、そして二人の子ども（？）である岬が去る。俺は感傷に浸りきった眼差しで遠くを見つめながら、窓ガラスに手の平を押し付けた。

「今でも信じられねえな。お前ら家族がこの街から居なくなっちゃうなんてさ」

その横顔は我ながらイケてるはずだった。ドラマの最終回を思わせる寂寥感が大人の渋みに磨きをかけていたはずだった。しかしそのキメ顔は次の瞬間、無惨にも崩壊した。

「んがっ！」

臀部に鋭い衝撃が走った俺は、その場に蹲るとゆっくり振り向いた。小さな背中がとてとて可愛らしい足音を立てて友幸の足元に向かうと、そのまま彼の膝に抱き着いた。

「パパー。マサキ君がにづくりサボってるからお仕置きしてあげたよ」

二十代半ばにも至らない若輩者とは思えない風格を背負う友幸が、ニコニコと破顔しながら岬の頭を撫でる。

「よしよし。えらいぞ。でも玩具とはいえ後ろから刀で不意打ちは良くないぞ」

「でもねー、ママがねー、これでマサキ君のお尻を刺してきなさいってー」

その言葉を受けて俺は尻をさすりながら渚を睨みつける。彼女は素知らぬ様子で淡々と服を畳んでは段ボールに詰めていた。

「おうおうおう渚さんよおっ！俺は親友夫婦が引越して街を去るって言うからよおっ、センチメンタルな気分浸ってんのによおっ、そんな俺のケツを刀で刺すような教育を娘さんに施してんのかあっ？おおっ？」

わざとらしくチンピラを演じる俺に対し、渚は呆れかえるようにため息を漏らした。

「いや、サボってただけでしょ。大体街を去るとか大袈裟なんだっつうの。一駅分も移動しないから」

そうなのである。ただ賃貸から一軒家に移り、その際にたまたま市を跨ぐというだけの話だった。

岬が今度は渚の元に、とてとてと足音を鳴らして近づく。幼い頃の渚に似た目元で母親を不安そうに見上

げる。

「ママー……マサキ君怒ってるの？」

渚といえどにかく活発なスポーツ少女だったが、今ではすっかり母親の顔を見せるようになった。我が子を慈しむ深い愛情をその微笑みと声色で表す。

「大丈夫だよ。マサキ君のお尻ならいつでも刺して良いから」

「良くねーよ！　どんな騷けしてんだ！」

「でもね、他の人には危ないから絶対しちやダメだよ？　わかった？」

「うん！」

「はい。じゃあママと指きりげんまんね」

「ゆーびきーりげーんまーん……」

「人の話聞けや！」

俺のツツコミなど存在しないかのように、母娘で指きりを交わしきる。その様子を友幸が腹を抱えて笑っている。

「お前も笑ってんじゃねーよ」

俺は尻を磨るのと同時に唇を尖らしながらも、なんだか暖かい気持ちで胸が満たされていた。俺と渚が言い合っているのを、友幸が楽しそうに眺めているのが昔からの日常で、未だにそれが続いているのが嬉しいのだ。友幸も同じ気持ちなのだろう。その笑い声はいつも以上に豪放だ。

いづれ父親から建設の会社を継ぐ二代目社長は、既にその風体と佇まいを完成させていた。学生の頃から人望に厚く、生徒会長も務めていたその器は成熟されきっている。

「しかし何つうか今更ながらお前とは同い年って感じしないよな」

「うむ？　そうか？　俺はそんな風を感じた事はないが」

「社会に出ると特に顕著に感じるわ。だって俺らの年で一軒家持つって中々ないぜ？」

「中古だしオヤジにも金を借りたからな。そんな大した事じゃないさ」

なんというか、つくづく人を安心させる笑顔である。渚や岬は勿論、きっと会社の従業員も将来安泰だろうという気にさせてくれる。

「ていうかマサキ。あんたは社会に出てすらいないでしょ。なんで大学二留してんのよこのダメ人間」

親友を誇りに思っていると、その妻でありもう一人の親友である渚に冷たく罵られてしまった。

俺は押し黙ったまま再び窓に向き直った。そんな俺のポロシャツの裾をつんつんと引っ張る小さな手があつた。岬である。

「マサキ君……ダメ人間なの？」

俺は中腰になると岬の頭に優しく手の平を置いた。

「岬……俺はな、昔から地道な努力が出来ない男なんだ。つまりそれは言い換えると荷造りとか卒論とか、そういう些事に囚われない大きな男なんだ」

「何途中からイイ感じに自己アピールしてんのよ」

ジトっとした目で俺を見る渚と、そして懐かしむように笑う友幸。

「そういえば大学進学前の夏休みは、よく渚に補習で世話を見てもらってたな」

友幸のその一言で何となく俺と渚は目を逸らした。あの夏の事はいつも通りといえはいつも通りだったし、ほんの少し特別といえは特別だった。

俺と渚の友人としての交わり方がほんの少しだけ深くなった夏。あくまで友人として、である。

俺は席払いをすると、その友情の結晶である岬に苦笑いを向けた。

「とにかく、岬は俺みたいな男に引っ掛つたらダメだぞ。狙うならビッグな男じゃなくて小回りが利く男に
しとけ。わかつたな？」

岬はわかつたようなわからないような顔で首を傾げる。

「でも岬はマサキ君の事好きだよ？」

天使のような無邪気な笑顔でそう言う。本当に渚の子どもなんだろうかと思える程に愛らしい笑みだったが、きっと渚も友幸の前ではこんな顔をしているのだろう。

「だから将来マサキ君のお嫁さんになってあげるね」

これは岬の常套句であり、そしてその度に喜ぶのが友幸だった。本当にそうなってくれたら嬉しいと言わんばかりにうんうんと頷くのだ。その度に俺は何ともむず痒い気持ちにさせられる。

俺は岬の頭を撫でながら話を逸らした。

「それより岬は先にお姉ちゃんになるわけだからな。弟と妹どっちが欲しい？」

今度は岬が照れ臭そうにはにかんだ。

「えへへ。弟かなあ。一緒にサッカーするの」

如何にも渚の娘らしい返答である。

「じゃあ弟のお手本になれるように、パパとママのお手伝いする良い子にならないとな」

岬は元氣よく頷くと、再び渚の近くに駆け寄った。そして渚の隣にちょこんと座ると、母親の模倣をするように衣服を折りたたむ。その視線は時折渚の膨らんだお腹を楽しそうに覗き見していた。

渚は第二子を身籠っていた。もう安定期に入っている。

学生時代は運動部の助っ人で引っ張りだこで、年がら年中飛んだり跳ねたりしていた渚が二十歳もそこそこで二人目を産むなど誰が想像しただろうか。

「ほら、岬が頑張ってたんだからマサキもぼーっとしてないの。旦那と一緒に冷蔵庫積みこんできてよ」

「へいへい」

すっかり母親面も板についてきている。頼もしい事だ。友幸も腹の据わった妻を満足そうに笑う。

「俺よりも余程人の使い方が上手い」

「こういうのは人使いが荒いって言うんだよ」

「少なくとも昔からマサキの操縦は手馴れているからな」

「さっきの補習の話でもそうだけど首根っこ抑えてくるからな。お前もいつ寝首をかかれるかわかつたもん
じゃないぞ」

背後から俺の頭にゴムボールが投げつけられる。

「無駄口叩いてないでちゃっちゃと身体動かさせての」

男二人ですぐごとく作業に入る。岩々しい見た目の友幸が、その剛腕で冷蔵庫の片側を軽々しく持ち上げる。

「おいおい。俺はそんな簡単に持てないぞ。バランス考えてくれよな」

「何を謙遜している。一見華奢に見えるがジムに通ってるんだろ？」

「俺はナンパ用に細マッチョ維持してるだけだから。寝室のあのベッドは持てるか正直不安だぞ」

「ああ。あれは丁度新しいのを買ってあるから運ぶ必要は無い。業者に引き取りを発注しているからここで

待機していれば良い。その段取りなんだが俺が岬を連れて先に新居へ行っているから、その間にこっちで渚にベッドの対応をお願いしようと思う。男手が必要になるかもしれないからお前もここに残っていてほしいんだが」

「岬の子守の方が余程楽なんだけどな。最近の渚は輪に掛けて口煩くなってきたし」

「そりゃあ幼馴染が二回も留年したら気に掛けるだろう。俺だってそうだ。まあ俺は心配まではしていないがな。さっきは冗談めいて口にしていたが、マサキは常識に囚われない生き方が出来る男だ」

二人で冷蔵庫を台車に乗せながら、友幸は息一つ切らさずにそう言う。

「昔から渚は渚で小言ばっかだけど、お前はお前で俺を過大評価するよな。地に足が着いてないだけだよ」

「そんな事は無いさ。同じ男だから通じる事もある」

「俺と渚の間に男も女もあるかよ」

友幸は殊更豪快に笑った。

「確かにその通りだ」

そう。

俺と渚の間に男女の意識など介在しようはずもない。

なのであの補習まみれだったあの夏の日、エアコンが壊れた部屋で渚が服を脱いだのも俺を男と思っていないが故の行動だったし、たまたま溜まっていた俺がその爆乳で勃起してしまい、そのまま致してしまった行為も到底男女の営みとはかけ離れた雰囲気だった。

それから度々俺と渚は所謂セックスと呼ばれる儀式を結んだ。そこに肉欲や性欲は存在していたのかもしれないが、やはりお互いを異性として認識する事は無かった。

それはただただ友達同士が戯れているだけだった。そして繋がれば繋がる程深まるのは、友情だけだったのだ。

そしてその行き着く先に産まれたのが岬だった。俺と渚の友愛が結実して咲いた花。

俺と渚が二人残された部屋は、ベッドだけを残してがらんどうとなった。外は陽が暮れ始めている。

「すっかり片付いたな。大して移動しないとはいえ何だかんだで寂しくなるな」

「そんな事よりあんた本当に学校は大丈夫なの？」

全裸で仁王立ちする俺の前で、下着姿で座っている渚は、勃起した陰茎の裏筋に舌を這わせながら詰問する。その舌の柔らかさとは裏腹に、その声色はやや陰しい。

「口を開けばそればっかだな」

「あんたが余計な心配掛けさせるからでしょ」

渚は軽く俺を睨み上げると、既に我慢汁が漏れだしていた鈴口を舌先でチロチロと突いた。

「お前は自分の家族の事だけ考えてりゃ良いんだよ」

敢えて突き放すような口調で言ったが俺の本心である。旧友として渚一家の幸せを誰よりも願っている。

「そんなわけにはいかないでしょ。あんたも家族みたいなもんなんだし」

渚のその言葉にも嘘偽りが混じっていない事が、亀頭への献身的なキスを繰り返す唇から伝わる。岬の事は抜きにしても俺と友幸と渚は兄弟同然に生まれ育ったのだ。故に他人という意識も無い。恋愛感情を抱き合った友幸と渚はそのまま夫婦となり、俺とはそのまま親友であり兄弟のような関係性のままだ。

「友幸は心配してないって言ってたぞ。俺が常識に縛られる男じゃないってさ」

友幸の言葉を誇りに思いながら笑みを浮かべる。渚はため息と共に肩を落とした。

「何か知らんけど旦那は昔からあんたの事を買いい癖があるからなあ……」

「まああれだ。自分には無いものに憧れるってやつだろう。俺は俺で友幸の責任感の強さとか堅実なところを尊敬してたりするし」

「へえ、意外」

渚はニヤニヤと俺を見上げながら、中指の腹で睾丸を摩る。愛撫というよりかは遊んでいる。

「あと友幸が言うには、男同士だから伝わるものもあるんじゃないかって」

渚が心外と言わんばかりにクスクスと笑う。

「あたしとあんたの間に男も女も無いでしょ」

「同感」

俺の返事と同時に、渚の唇が俺の亀頭を包み込み、そしてそのまま竿を滑っていく。

気さくに言葉を交わしていた口が、そのまま生殖器のように男根を啜えこむと、首を前後に振った。

ちゅく、ちゅく、ちゅく、ちゅく。

その水音は間違いなく淫らであり、這う唇や舌の感触と共に俺の肉角は益々仰角を上げさせる。しかしやはり性的な興奮とは明確に一線を画す。

くっちゅ、くっちゅ、くっちゅ、くっちゅ。

それでも気持ちが良いものは気持ちが良い。ガチガチに勃起した男根を艶やかな唇で擦られ、暖かい舌で舐められると思わず吐息が漏れる程に心地良い。

ベッドの業者は手違いがあり、到着が大分遅れるとの事だった。荷物もすっかり片付いた部屋は暇をつぶすものも無く、かといって離れるわけにもいかなかった。

俺と渚がこうやって友情を深めるきっかけはいつも何となくだ。何となくラーメンが食べたくなって、何となく友達を誘った。暇だったらその誘いを受けるし、気が向かなかったら断る。そんな関係。

渚はフェラの休憩がてらに口を離しては、竿を舐め回しながら言う。

「でも実際さ、あんた将来の事ちゃんと考えてるの？」

「まあそれなりに」

「前も言ったけど、最悪友幸の会社に世話になりなさいよ」

「それは絶対嫌だって言っただろ。俺がへまこいた時に友幸が責務と友情の板挟みになるかもしれないだろ」

「あんただったらどんな仕事でも器用にこなすただけだね」

渚は俺の考えも理解しているの、それ以上は何も言わない。というか再び啜えこんだので言葉を発せない。先程よりも吸い付きと首の振りが強まる。

じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ。

渚の口元から涎が垂れる程の濃厚なフェラ。俺も思わず口が半開きになって、垂涎してしまいそうな程の快感を得る。

腰にじわじわと蓄積する射精感の中、涎が垂れた大きいお腹に目が行く。岬は多分俺の子らしいが、この子は確実に友幸の子との事。俺としていないタイミングでの妊娠なのだから、それも当然の話である。渚は浮気をするような人間じゃない。俺とのこういう事は、浮ついているどころか軽すぎて空気だ。

男根が限界以上まで膨張する。渚はそれを唇で察知した。今まで付き合ったどの彼女よりも、渚の方が俺の生理反応に詳しいかもしれない。

渚は右手で爆発寸前の肉槍を無造作に扱く。雰囲気も含めてその所作は淫靡さとは程遠い。しかし唾液を潤滑油としてチュクチュと鳴る音や、すべすべの手による摩擦は頭の芯から痺れさせる。射精が目前と迫る中、渚の頬が更に茶化すように緩んだ。

「マサキってさ、岬に『将来結婚してあげる』って言われるの実は照れてるよね。あれ笑えるんだけど」うるせえ、と悪態をつく事も叶わずに、「うっ」とだけ呻き声を上げると、俺は盛大にビュルビュルと射精した。肉棒は精液を吐き出しながら、渚の手の平の中で暴れるように跳ねる。

ゼリー状の濃い白濁液は渚の顔から胸、そして腹部まで白く染め上げる。渚はその間中、ゲームでの勝利を誇るような笑みを浮かべ続けていた。

射精の余韻が抜けきらずにヒクつく男根を握りながら遠慮のない口調で言う。

「馬鹿みたいに濃いビュルビュルお腹に飛ばしすぎ。赤ちゃんがビックリしたらどうしてくれんの」

絞る取るような手つきは後戯というよりは遊戯だ。

「……俺の息子を玩具扱いしてんじゃねーよ」

「あんたと一緒に立派になったのは見た目だけでしょ。ほらまだガチガチじゃん。出せるだけ出しちゃいな」何とも大雑把に扱かれ、びゅっびゅと射精を促される。それが収まりつつあると、渚はニヤニヤしながら男根を啜えた。粗雑な手コキが嘘のように、優しくちゅうちゅうと吸った。

口を離すと竿に付着した精液を舐め取っていく。カリの裏から竿の根本まで舌を這わすのに余念が無い。ガサツな渚は昔からお掃除フェラだけは丁寧だったが、母性の影響か最近輪に掛けて舌遣いが細やかだ。それが終わると舌の腹で睾丸を持ち上げて優しく転がしながら、俺をからかう。

「もう金玉ずっしりしてきてんじゃん。やりたくなっちゃった？ お腹に友幸の赤ちゃん居るのにな？」



ようやく軽い放心状態から戻ると、渚の舌に睾丸を弄ばれながら口を開く。

「やっぱ妊娠してる姿って妙にエロいよな。例えお前でも」

「最後の一言は余計」

渚はクスクス笑いながら睾丸を頬ぼった。その温もりの中で睾丸が安らぎを感じている。彼女が口にした通り、精子が再び生産されていくのを感じる。

渚は俺を小馬鹿にするように鼻で笑った。

「またあたしの事、孕ませたくなっちゃった？」

「バーカ」

そう鼻で笑いながらも、ビキビキに勃起した陰茎が上下に揺れる。

「おちんちんは正直すなあ」

渚は男根を指で軽く弾くと、赤子をあやすようなキスを亀頭にした。

「ちゃんと後でエッチしてあげるからね。我慢我慢」

「おいおい。今度は俺の息子を子供扱いか。あんま舐めんじゃねーぞ」

「あたしに舐められるの好きなくせに。こーんな涎垂らしちゃって」

人差し指で鈴口を撫で回すと、それを離して我慢汁の糸を引かせた。そしてそれを口元に持っていくと舐めて、俺をからかうように見上げた。

「やっぱり赤ちゃん欲しがってる味してる」

「どんな味だよ」

俺は腰を下ろすと渚のお腹を手の甲で撫でた。

「岬の時も勿論感慨深かったけど、友幸との赤ちゃんってなるとまた別の感動があるよな。俺さ、友幸からこの子の懐妊聞いた時泣きそうになったもん」

渚が呆れながら俺に軽くチョップをした。

「岬の時は泣かなかった癖に」

「そりゃ岬は…：責任感とか色々あるだろ。でもこの子は手放しで喜べるというか。お前だって相手が俺と友幸じゃ色々違うだろ」

そう言いながら渚のショーツを脱がしていく。渚は渚で俺の暴れん坊を気軽にシコっていた。

「ん〜…：どうなんだろ。そりゃあ旦那とマサキに対する気持ちは全然違うよ。例えば二人で遊ぶにしても旦那が相手だとデートって感じに自然となるし、あんだとやっぱり友達以外の何者でもないし。あ、でもどっちが上っていうわけじゃないんだけどさ」

「そりゃそうだろ。俺もお前と友幸どっちが上かなんて考えた事ないし、それは友幸も同じだろ」

「でしょ？ だからあたしにとっては二人とも掛け替えのない存在ではあるんだ」

「勿論友幸にとってどっちが大切かって聞いたらお前って答えるだろうけどな。子供も居るんだし」

渚はゆっくりと仰向けにベッドで寝ながら笑った。

「妬いちやう？」

「妬くか馬鹿」

「とにかくさ、あたしにとってあんたら二人ってそんなんだから、むしろ二人の子供を産むのが当然のようにはすら思ってた節があったわけ。昔からキーキは三人で分けてたじゃん。それを恋愛で結ばれたからってあたしと友幸だけで独占するのも変かなあって」

一人出産済みでも綺麗な陰唇に亀頭を添える。ゴムを着けていないが渚は何も言わない。俺達の間には結ばれた信頼感はその家族だの友人だのと、世間が当てはめる常識では測れない奇妙な絆があった。

渚は若干真面目な雰囲気から一転しておちゃらけてみせた。

「だから今まさにあんたがさ、あたしの事を妊娠させたくて仕方ないって感じにおちんちんバッキバッキにしても仕方が無いかって」

「流石に今は友幸の子供が居るんだからそんな風には思っていないっての」

そう返しながら腰を進めて渚の中に入る。一つに繋がる。それは俺達にとって何も特別な事ではない。物心がついた時からずっと以心伝心の仲だった。そこに身体が追いついただけ。

「んっ」

渚は挿入した瞬間だけ顔を蕩けさせたが、すぐに気さくな笑みに戻る。

「……でも勃起ちんぽ硬すぎなんですけど？」

「俺がどれだけ妊婦モノが好きか友幸に聞いとけ」

「聞かそんなの」

ゆっくり腰を前後させる。西日が差し込む何も無い部屋に、ベッドの軋む音がよく響いた。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

大抵の性癖は友幸と共有してきたが、妊婦の良さだけは分ち合う事が出来なかった。今でも友幸は妊婦というものを神聖視しており、渚が妊娠している時期は性的な接触を一切求めないらしい。

別に渚はそれを不満に思っているわけではないだろうが、それでも欲求というものは自然と蓄積される。

「あっ、ん………やっ、きもち………」

渚の声は心底心地良さそうだった。

「すげえ可愛い声出すじゃん。お前も溜まってたんじゃないのか」

俺がそう尋ねながらブラのホックに手を伸ばすと、渚はそれに合わせて背中を少し浮かしながら笑う。

「どうなんだろうね。毎日大変だからあんま気にする暇も無かったけどそうなのかも。超気持ち良いもん」

経産婦とは思えない綺麗な乳輪が露出する。乳肉のポリユームだけはしっかり妊娠の恩恵を受けていた。

元々果実のような爆乳は、更にずっしりとした質量を誇示する。

俺は左手で右胸を中央に寄せるように揉みしだきながら、顔を右胸に近づける。

「渚だったら妊娠してもナンパされんじゃねーの。その辺の男を引っ掛けてこいよ」

そんな冗談を口にしながら桃色の乳頭を甘噛みした。

「はうっ」

甲高い声と共に肩が震えた。

そんな愛らしい反応の直後、渚は気安い笑みを浮かべる。

「バーカ。他人とエッチなんて絶対嫌でしょ」

渚の言う『他人じゃない、それでいて身体を繋げる対象の人間』とは、結局のところ友幸と俺しかいないのだ。

「不倫の一つでもしたらお前でも少しは色気が身に着くんじゃね」

勿論渚がそんな事をするわけがない。それがわかっているからこそ叩ける軽口だ。

「普通親友の嫁にそんなアドバイスする？」

左右の乳首をそれぞれ舌で転がし、指で摘まみながら答える。

「だからこそだよ。お前がもっとエロくなれば友幸も妊娠中だろうがヤル気になるかもしれないだろ」
渚は「何馬鹿な事言ってるんだか」と言いたげに笑う。しかしその頬は明らかに紅潮しているし、俺が強めに乳首を責めると切なそうな吐息を漏らす。

そんな淫らな雰囲気は薄っすらと漂いつつある中でも、俺達が交わす視線に不純物は混じらない。
渚は友人との馬鹿げた会話の延長でしかない笑顔を浮かべる。

「じゃあマサキが責任もって色っぽくしてみてよ」

「しゃーねーな。俺の友情パワーでお前を淫乱にしてやる」

「何それ。本当馬鹿なんだから」

渚が愉快そうにケラケラと笑う中、俺は上半身を起こして正常位で腰を振りやすい体勢を取る。

しかしあくまで腰使いは細心の注意を払うように穏やかだ。確かに渚の中はとても暖かくて気持ち良い。しかし身籠っているのに欲望に任せて根本まで挿入などしない。カリで膣壁を擦る事に重点を置く。

「んっ……んっ……ふう……く……」

笑っていた渚の表情が徐々に蕩けていく。

「やつ、あつ………それいい……好き……」

一見すると完全に女の顔と声になっているが、俺と渚の関係上それは有り得ない。渚は俺を茶化す為に口元をニヤつかせた。

「普段は猿みたいにガツガツ腰振るのに、妊娠してる時だけエッチが優しくなるの笑える」

「お前が『激しいの欲しい』とか『もっと強くして』って言うからだろが」

「え、あたしそんなの言ってる?」

「言ってるわ! しかも何回戦もした後だろうがお構いなしにトップギアを要求してくるからな。こっちはお前みたいな元アスリートじゃないっつうの」

「あんたは運動不足だからね。鍛えてあげてんの」

「そりゃどうも」

ムードもへったくれもない会話を交えながらも、しつかりやる事は続ける。

「んっ、んっ」

渚が瞼と唇を閉じる。

「あつ、ん……はあつ、あつ……」

優にメロンは超えるであろう大きさの乳房が、ゆったりしたピストンに合わせてタップンタップンと揺れる。

「あつあつ……ねえマサキ……」

声に余裕が無くなると、渚が潤んだ瞳で俺を見る。

「……あたし、やばいかも」

「イキそ?」

「ん……」

「いいぞ。このままゆっくり続けるな」

「……うん」

渚は再び瞼を閉じると、両手でシーツをぎゅっと握った。俺は気持ちピストンの回転を上げる。

「あつ、あつ、あつ♡」

それでも荒々しさとは無縁の抽送。しかし乳房は派手に揺れ、渚の声はその膣壺と同様に濡れた。

「あっ、いっ♡ マサキっ、そこだめっ♡」

お互いオシメが取れる前からの仲だ。渚の事は何でも知っている。何が好きで、何に怒るか。そしてヌルヌルになったこの膺壁を、どういう角度でどう擦ったら悦ぶか。

「あっあっ、いっいっ♡ イクっ、イクっ♡」

渚は切羽詰まった嬌声を上げながら薄目で俺を見る。言葉は要らない。意志は十分伝わる。

「アクメ寸前まで俺の世話焼いてんじゃねーよ。好きにイっつけ」

「……やだ。マサキと一緒にイク……」

友第思いの渚は嬉しい事や辛い事は勿論、そして気持ち良い事も一緒に良いのだろう。しかし友幸と渚は両想いで、恋人になり、そして家族になった。どうしたって俺は部外者になる。渚はそれが寂しいのかもしれない。

「別に良いだろそんなの。先にイケって」

渚の額には絶頂を間近に控えた熱気で汗が滲んでいた。そんな昂ぶりの中でおどけるように唇を尖らせる。

「だってマサキ、放っておいたら全然後をつけてこないじゃん。大学もまた留年してるし」

身体も繋がった状態での小言は心に突き刺さる。

「流石にちょっとは気にしてんだから言うなよ」

二度目の妊娠という事もあって、友幸も渚もしっかり地に足が着いた落ち着きを見せている。岬も毎日のように成長している。俺だけが何となく置いてきぼりを喰らったような劣等感や焦燥感が無くもない。

俺が渚の事を何でも知ってるように、渚にとっても俺の心情など手に取るように理解している。ただでさえ今は何も着けずに繋がっているのだ。更には摩擦による熱で互いの性器は溶け合い、その境目は曖昧となっている。

「……とりあえずさ」

渚は両手を俺に向けて開いて、ニツと明朗活発な笑みを浮かべた。

「チューしよっか」

「なんだよそれ」

不思議なもので俺達の間でセックスは気持ち良く汗を掻く行為でしかなく、抵抗感の類は全く無い。しかしキスはちょっとだけ気恥ずかしかったりする。

「今更なに照れてんのよ。いいからホラ。おいでったら」

渚は冗談めいた仕草で唇を突き出す。

俺もやれやれとため息をつきながらも、渚の頭の左右に肘をつけてそのまま唇を重ねる。

渚の両腕が俺の首に巻き付くと、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、とじゃれあうようにキスをする。

心も身体も柵が無い俺達だが、一つだけ不文律があった。それはキスの時に唇と同時に舌が触れ合わない事。それは恋人のするキスだから。なので俺達の友キスは唇だけを押し付け合う事が多い。それかたまに余興として舌先だけを触れ合わせる事もする。

上半身を倒した事で、俺の腹部が渚の膨らんだそれと密着する。勿論上から圧力を与えないように気をつける。

親友同士が紡いだ新しい生命の胎動を、へソで直接感じるのはより深い感無量を得た。

ちゅっちゅと唇を啄みあいながら問いかける。

「この子の名前とか考えてんの？」

「旦那は湊とか良いんじゃないって言ってる。男女どっちでもいけそうだし」

「ああ、渚から岬だもんな。海関連で良いかも」

「そんな微笑ましい話題と共に唇を甘噛みしあう。」

渚の肉壺はいつでも絶頂出来る程に熱々で、纏わりつくようにグニグニと男根に絡みついてくる。

「なんかこれってある意味友幸と3Pしてるみたいなものだよな」

「確かに。ていうか今度旦那に三人でしよっかって提案してみる？」

「やだよ。あいつ絶対二つ返事で快諾するだろう。あいつの前でお前とやりたくないわ」

「えーなんで？ あたしら三人なら楽しそうじゃん」

渚も本気でそんな事を提案しているわけではないのは判っている。しかし俺にその提案を気軽に同意できない後ろめたい理由があった。上から下まで一つになっているこの状態で、渚に嘘をつき通す事は不可能だ。

俺は咳払いをすると、正直に言った。

「俺さー、友幸と二人の時には散々『よくあんなガサツな女で勃つな』って小馬鹿にしてるからさー」

渚はすかさず俺の下唇を歯で噛んで引っ張る。

「痛い痛い。ギブギブ」

口を離すと渚は口端を持ち上げて俺をジト目で睨む。

「今もあたしの中でギンツギンに勃起してるよね？」

「はい。もうギンツギンです」

「なんか余裕で先にイカしてやるぜーって雰囲気出してたけど、ぶっちゃけあんたもいつ射精してもおかしくないくらいにおちんちんパンパンだよな？」

「うす。渚さんのおまんこザラザラで最高っす」

「それでよくそんな事言えたねあんた」

「いや、普段そう思ってるのは事実なんだって。友幸すげーなあって。よく渚で興奮出来るなあって」

「じゃあこのガチガチちんぽは何なんですかね」

「それは……ほら……：……友情の血潮？ みたいなの？」

「ふーん。その友情の血潮とやらで友幸相手にもこんな風に勃起するんだ？」

「あいつにはおっぱいもおまんこも無いからな」

俺の即答に渚はカラカラと笑った。

「つうか渚も普段から俺に欲情されてたら嫌だろ」

「まあそりゃそうだ」

下らない話をしている。セックスらしい空気になったと思えば、お互い絶頂を控えた性器で繋がっていると思えない砕けた様子で冗談を投げ合う。

「お前とのセックスっていつもこんな感じになるよな」

「あたしらしくて良いじゃん。それとも愛を囁き合っちゃおう？」

「お前に囁く愛など無い」

俺の芝居がかった憎まれ口に対して、渚は晴れやかな笑みで返す。

「あたしはマサキの事愛してるけどね」

グニグニと柔らかく締め付けられ、精液を吐き出したくて仕方なく膨張する男根を膣で啜えこみながら、異性としての情念を全く感じさせない笑顔と口調。

友幸と並んで無二の親友にそんな事を言われたら俺も応えなければならぬ。

「渚。俺も愛してるぜ」

わざとらしく声を低くして囁く。

「あれあれ。あたしに対する愛なんて無かったんじゃないの？」

渚がくつくつと笑い、ベッドの軋む音も再び大きくなり始める。

「連続三日目のソーマンくらいは愛してるぞ」

「セックスするくらい仲が良い幼馴染なんだからもうちよいランク上でも良くない？」

そんな彼女とちゅっ、ちゅっ、と唇を押し付け合いながら腰を振る。

「んっ……んっ……あっ、ん……やば……腰振られちゃうとすぐイキそう……」

渚はすぐに表情をとろんと溶かして女の顔になる。しかしそれはあくまで表面上の事。

「あっ、あっ、あっ、あっ……♡」

再び頂を目前にした渚が吐く吐息はあまりに可憐で甘ったるい。それでも彼女の口から漏れる色香は女としてのそれではない。

「マサキ……おっきい……♡」

「大きい好き？」

「……好き……マサキの大きいちゃんぽ好き……♡」

「俺もお前の中に入るの、すげえ暖かくて好きだわ」

収まる場所に収まった安心感。恋人では絶対に味わえない独特の弛緩。

渚は嬌声を上げながらも、無理矢理口端を持ち上げた。

「……マサキだったらいつでもあたしの中に入ってきて良いよ」

迫りくる絶頂にその笑みも切なそうに溶ける。それでも口にするのは友人としての言葉。

「あたしとマサキはいつも一緒だから」

「友幸もな」

俺は上体を起こすと両手を広げて渚のお腹に添えた。渚もそれに倣う。友幸の渚が紡いだ生命で膨らんだ上で、俺と渚が両手を重ねる。

青筋を立てて荒ぶる俺の男根。それを抱擁する渚の柔らかい肉壁。そして近い未来に息吹くであろう友幸の種。

「ずっと三人一緒だから」

俺達の声が完璧に重なる。重なったのは声だけではない。どちらからともなく両手の指を絡めて握り合う。

友幸の子を出産間近に控えたお腹の上で、俺と渚は互いの体温を分け合うように手を握る。

抜き差しする肉棒は渚の愛液で真っ白に泡立っていた。

渚の大陰唇はアワビのように口を開いて、荒れ狂う俺の出入りを愛でてくれる。この膣口からやがて湊と名付けられる友幸の赤子が産まれると思うと、岬の時とは違う多幸感が胸に去来した。

俺はある種の使命感すら背負って腰を振る。

「あっ、あっ、あっ♡ マサキっ、すごっ♡ あっいっ♡」

「しっかり産道ほぐしておいてやるからな」

半開きとなっている渚の口元からは薄っすらと涎が垂れる程に恍惚としており、あとほんの数回のピストンで彼女が達するのは明らかだった。そんな中で渚はコクリと頷く。

「うん……友幸の赤ちゃんが出てきやすいように、マサキのデカチンであたしのおまんこ広げておいて」それは母であり、友の言葉だった。

「あたしの妊娠まんこ……マサキの勃起ちんぽの形にしていよいよ……」
「気付けば腰の回転が加速していた。乱暴に奥だけは突かないように渚の中を擦る。」

「あっ、いいっ♡ いっ、いっ、イクっ、イクっ♡」
「精液が尿道を駆け上がる。」

同時に昇り詰める。

俺と渚は改めて強く両手を握り合った。

「……このおちんちんでも一回妊娠してるんだから……マサキの親友ザーメンで孕んだ時みたいにおまんこ
舐けてっ……パパの極太ちんぽでズボズボして、赤ちゃん産みやすいまんこにして……」

「渚っ！」

「パパっ、来てっ♡」

ビクビクと痙攣しながら渚の肩が浮く。元より肉圧の高い蜜壺が、四方八方から俺を締め付ける。俺は慌
てて腰を引く。

窮屈な渚の膣内から解放された肉角は、ビキビキと筋肉を軋ませながら派手に前後に揺れた。俺はそれを
渚のポテ腹に押し付けると、そのまま腰の動きだけで扱って射精した。

渚のお腹は赤子を守る為にしっかりと硬く、しかしその肌はしっとりとしてスベスベな上に汗で濡れていた。
両手は恋人繋ぎをしたまま、裏筋を押し付けて擦るように腰を振った。その度に粘り気の強い精液がビュ
ッ、ビュッ、とお腹の上に飛び散った。

渚はハアハアと息を荒げながら絶頂の余韻に浸りつつ、俺の射精の様子を潤んだ瞳で見届けていた。
へソの中に入った白濁液はすぐに溢れて漏れた。渚は浅い息遣いの中、感嘆するように口を開く。

「……やっぱマサキの赤ちゃん汁ってすごいよね。ゼラチンの塊かってくらいプルンプルンだし」
セックスの熱気が残っているのは身体や周囲の空気だけ。その声色は既に気安い。

俺は俺で渚のポテ腹に男根を擦りつけながら、残った精液をドクドクと垂れ流しながら答える。
「どうも渚とするといつもより濃いのが出る気がする」

「マジで？ 駄目じゃんかノジヨの時の方に気合入れないと。それともあれ？ やっぱりあたしとまた赤ち
ゃん作りたくないじゃないの？ ん〜？」

渚がニヤニヤしながら右手で勃起したままの陰茎を握る。そのまま何とも無造作に扱ってくる。とても異
性の性器を触っているという意識は感じられないし、俺も感じない。

それでも気持ち良いものは気持ち良いので、渚の手の中でヒクつきながら精液を垂れ流す。
「ほら。まだ出てくるし」

「だからこれは友情の塊だと何度言えば」

「あなたの友情の塊、すごいネバネバするんだけど」

渚は手に付着した精液を、遊ぶように指で弄って糸を引かせた。そしてその指を舐める。

「相変わらずあなたの友情は苦いね」

「ふっ。俺も人生経験を経て渋みのある男に成長したからな」

「いやあなたのザーメンって昔からこんな味だったし。あと人間的に全然成長してないから」
渚にそう言われると俺は反論が出来ない。

渚は明らかに成長したように見える。それは何も伸ばした髪や、妊娠したお腹による変化の話ではない。きつと俺の知らないところで主婦や母親として壁にぶつかった事もあるのだろう。そしてその度に友幸と二人で、もしくは岬と三人で乗り越えた。

俺には想像も出来ないそういった経験の積み重ねは、人間としての深みを与えるに違いない。

渚の性格自体は昔のままだ。大雑把で活発的。

「でもやっぱり大人になったよな。お前ら」

「何よ急に」

渚が起こして欲しいとジェスチャーするので丁重に引き起こす。ベッドの上で向かい合って座ると、気だるそうな渚は顎を俺の肩に乗せた。右手は男根をそっと握ってきたが、勝手気ままに摩ったり突いたりで、やはり後戯というよりは玩具で遊んでいるようだ。

鼻先に渚の香りが漂う。昔から変わらない柑橘系の匂い。渚の髪はいつも学生の夏を連想させる。

「あんまりお前らが先にズンズン歩いていくから、流石にちょっと焦りが出てきた気がする」

俺の本音に渚が鼻で笑う。

「マサキはそれくらいで良いの。いつも尻に火がつくまで動かないんだから」

「たまには立ち止まって待っててくれよな」

「やだよ。放つといたらブーブー言いながらもついてくるでしょ」

「冷たい親友だなオイ」

そう言いながらも渚の信頼が嬉しかったりする。細かいところに小言は多いが、根幹の部分では俺という人間を微塵も疑っていないのは友幸と一緒だ。だから俺も何の根拠もなく前進できる。

心がリラックスすると自然と体も温まる。渚は指の背や手の甲で摩っていただけだったが、それでも陰茎はいつの間にか痛むほどに勃起していた。

渚はその屹立をからかうでもなく、俺の首に唇を押し付けて吸うと小声で呟いた。彼女にそんなつもりは無かっただろうが、その囁きは妖艶に聞こえた。

「もっかいあたしの中に入る？」

俺は無言で渚の乳首を軽く弾いた。

「やっ」

愛らしい声を上げながら身体を震わせる。ともかくそれが俺の返事と伝わると、渚は男根をちゃんと握り直して穏やかに扱きながら、俺の首筋にねっとり舌を這わせた。背筋に緩い電流が走ると同時に、ドクンと男根が脈動して硬度を増した。

渚が耳たぶを甘噛みしながら愉快気と言う。

「ヤル気満々じゃん」

「リアルじゃ中々お目に掛かれない綺麗な爆乳だし？ 面もまあまあだし？ ヤル事やっとかないと損かなくて。そんな感じっすわ」

「うーわ。最悪な発言。女の子を何だと思ってるのこいつ。刺されれば良いのに」

「心配するな。女の子と思ってる相手には絶対こんな事絶対言わないから」

売り言葉に買い言葉を叩き合いながら、俺達は笑みを浮かべてじゃれ合うようなキスをする。

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、と粗雑に唇を押し付けあうと、渚が俺の腕の中で身体を半回転させた。

俺の上半身を背もたれに見立てて体重を預けてくる。その状態で渚は首を仰げ反るように俺を振り返り、

鈴のその後

「付き合うって何をするんでしょうか？」

花丸書店の朝は早い。新刊を早く手に入れるという名目で、登校途中に立ち寄る事は珍しくない。

そして花丸書店のレジには僕が長年恋をしている三つ葉ちゃんが常に立っている。唯一の友人に後押しされ、彼女と電話番号を交換するに至れた僕は少しだけ色気づいた毎日を送っていた。

「え？」

そんな僕に、三つ葉ちゃんは難問を問いかける。

「付き合うって何をするんでしょうか？」

聞き返した僕に一言一句変わらず、そして眉根一つ動かさずに聞き直した。

男子生徒の中では小柄な方の僕に輪を掛けて小柄で、黒髪のショートボブが似合う愛らしい目鼻立ちの彼女は元々表情に乏しい。何となくという理由で学校にも行っておらず、どこか浮世離れしている。

僕は購入予定だった小説を手にながら、レジの前で硬直した。

「それ、買わないんですか？」

無表情のまま小首を傾げる。

「あ、うん。買うよ。買う」

慌てて本を差し出した。彼女はバーコードを読み取りながら、中々答える事が出来ない僕に平坦な抑揚で言う。

「土屋さんは、私と付き合いたいと思ってるのではないのですか？」

更に喉が詰まる。

彼女のスケジュールの調整待ちではあるが、デートに誘って承諾もされてはいる。それで下心はありませんなんて話、一体誰が信じるというのか。

誤魔化す事ではないと腹を括る。

「……それも目標の一つです」

三つ葉ちゃんは一度だけ僕をちらりと見やると、そのまま視線を伏せて何事も無かったかのように購入した本にブックカバーを掛けていく。手慣れた動作に淀みは無く、その顔色と同様に困惑は一切見られない。

大して僕は耳まで真っ赤なのが否応なく自覚してしまうし、バクバクと五月蠅い心臓の音は外に漏れていないか心配になる程だった。

「そうですね。勇み足でなくて良かったです。そこでもう一度質問なのですが、付き合うって何をするんでしょうか？」

「……正直わかりません」

「そうですね」

彼女には落胆も失望も無かった。ただいつも通り淡々と包んだ商品を僕に差し出した

「そこに何か私が変われるヒントがあるかもしれないと思いましたが、そう簡単ではないですね」

それを受け取る僕は緊張で喉がカラカラだったが、こんなに彼女と会話が続いたのは初めてだったので、

勢いに乗って疑問を問い返してみた。

「変わりたい……と思ってるんですか？」

「どうでしょうね。ただ土屋さんはお友達のおかげで変わる事が出来たんですよ？　それが少し羨ましいなどは思いました」

店を出て、学校に向かう途中、僕は彼女の言葉を何度も反芻した。

何も答えが出ないまま教室に着く。ホームルーム前のその空間は賑やかな活気に満ちていた。僕はその中を堂々と歩いていくが、誰も僕に目をくれる事はない。

昔から孤独を恐れた事は一度も無かった。結果として僕は学校という社会の中で、ごく自然に透明な空気として振舞うようになった。隅っこで一人の世界に浸る。それが一番居心地の良い過ごし方だったのだ。

しかし初めて出来た友達達は、そんな僕の世界にずかずかと入り込み、そしてちよこんと隣に座るのだ。いつの間にかそれが僕にとつての安らぎとなっていた。

「ツッチー、おっはよー！」

席に座った僕の肩に気安く肘を乗せてくるのは鈴音真理。先程までこの教室の中心になっていた女子だ。誰にでも分け隔てなく楽しそうな笑顔を向け、そして学校でも指折りのルックスを持つ彼女は間違いなくクラスで随一の人気者だった。僕が唯一心を開いた家族以外の人間でもある。

僕は彼女のおかげで少しだけ変わる事が出来た。偏屈な僕の全てを受け入れてくれて、友情の貴さを学ばせてもくれた。そして何より最初から諦めていた三つ葉ちゃんへの片思いを一步踏み出させてくれた。彼女の後押しが無ければ、三つ葉ちゃんと会話を交わす仲にすらなれなかっただろう。

「おはよう鈴」

「なんかちよつと顔赤くない？　風邪？」

きつと三つ葉ちゃんと言葉を交わせた影響だろう。今も心臓は高鳴ったままだ。

「いや、大丈夫だよ」

「本当に？　熱あるんじゃない？」

鈴はまるで我が子か弟にするかのように手の平を僕の額に当てる。その距離感はそのまま僕らの関係性を表していた。実際鈴にそんな事をされても僕はたじろぎもしない。ただ男子の嫉妬の視線が痛い。

「ふーん。確かに熱は無いね。でもあんま無理しちゃ駄目だよ？」

そう言い残すと彼女は自分のグループに戻って行った。

僕も何事も無かったかのように鞆から机に教科書を詰め込むと、頬杖をついて窓の外を見上げた。三つ葉ちゃんの問い掛けをもう一度考える。

恋人として付き合うとは一体何なのだろうか。

最近ようやく鈴を通して、友人関係というものを理解したばかりの僕には雲を掴むような話だった。

そんな調子で午前の授業を過ごしていく。すると昼休み前の授業中に鈴から携帯にメッセージが入る。

『やっばりいつにも増してボーっとしてない？』

『実は今朝花丸書店に寄ってきた。後で相談したい事ある』

『いいねいいね。積極的じゃん。ツッチーの恋バナ超楽しみ。放課後にツッチーの部屋で詳しく聞くよ。例の約束憶えてる？』

『勿論』

『実はちよつと緊張してたりする』

席が離れている鈴はこちらに少し顔を向けると、照れ臭そうに頬を掻いた。

『僕はそれ程でもないけど』

『そりゃツツチーは入れるだけだし。あんな太いのお尻に入れられるこっちの身にもなってよね』

今日、僕は親友とアナルセックスをする。不思議と非現実的な感情は沸かない。むしろ自然な成り行きにしか感じない。

『ちゃんとじっくり時間掛けて準備してきたんだから大丈夫だよ』

鈴はジイっと何か言いたげな視線を僕に飛ばしている。その頬は微かに赤い。

『その節はどうもお世話になりましたっ！ 人畜無害そうなツツチーがやっぱり鬼畜だという事を再確認する日々でしたっ！』

『鈴が痛い思いをしないように頑張っただけじゃないか』

僕達が新たな友情の扉を開ける為にアナルセックスをすると決めてからは、毎日のように鈴の肛門を弄っては拡張する日々が続いた。セックスをした時はそのついでに。そうでない時も戯れで。

その甲斐あって最初は指一本の挿入でも難儀した鈴の初々しい肛門は、今では三本啜えこんでも痛みを感じなくなる程に経験を積んでいた。

鈴は相変わらず頬杖をつきながら、僕を非難するような流し目を向けている。

『結構スパルタっていうかD振りを発揮してたよね。三十分くらい指入れっぱなしとかさ』

『鈴も気持ち良くなってたじゃん』

僕のメッセージを確認すると、鈴はいよいよ本格的に僕を睨んできた。ほぼ同時に教師が鈴を指した。

「はい鈴音さん。ここでロシアと清が結んだ条約は？」

「アイグン条約です」

「正解。それでだな……」

鈴が即答すると教師も僕達に背を向けて黒板にチョークを走らせる。鈴はため息を吐きながら机に突っ伏していた。少し間を置いてメッセージが送られてくる。

『ツツチーの加虐嗜好を弾劾するのはまた今度の機会にするとしてやっぱりドキドキする。だってツツチーのすっごく大きいからさあ』

『予定を先延ばしにする？』

僕も鈴もアナルセックスの決行自体を取りやめるつもりは無かった。どちらから言い出した事かも曖昧だったが、そうする事が当然のように二人の共通認識になっていた。新しいカフェが出来たから一緒に行くのと変わらないくらいに、ささやかな挑戦でしかなかった。

『折角覚悟を決めたんだし今日しときたい。そこで提案なんだけどさ……』

鈴の提案を承諾すると、僕は窓の外を眺めた。急遽この後の昼休みに予定が組み込まれた友達との時間は、勿論楽しみではあるがやはりそれも日常的な安穩でしかない。

僕の心をかき乱すのは三つ葉ちゃんの事だけだ。

昼休み。いつも通り教室の隅で一人昼食をとる。たまに鈴と屋上で食べる事もあるけれど、彼女は人気者なので大抵は自然と輪の中心になっていて、僕に構う暇はあまりない。

それを寂しいと思う事はない。元々これまで友達らしい友達など居た事もないし、皆で賑やかに談笑しながら食事など想像も出来ない。

僕にとってこの世界は多様性に溢れすぎていて目まぐるしい。誰一人として同じような人間は居ない。そんな中で僕は三つ葉ちゃんに恋をして、そして鈴と友達になれた。それは奇跡のような幸運に思える。僕は早々にお手製の総菜パンを喉に詰め込むと、和やかな雰囲気のある教室を後にした。鈴との約束の前一度自宅に帰る。取ってきたい物があつた。急げばすぐに戻ってこられる。

学校に戻るとそのまま鈴との待ち合わせ場所に向かう。特別教室が詰め込まれた棟の三階は人気が無かった。そんな閑散とした廊下に、ぼつんと鈴が立っていた。

彼女は僕の到着に気が付くと嬉しそうに小さく手を振った。

「すぐに教室出てったから先に待ってるかと思った。どっか行ってたの？」

「うん。ちょっと忘れ物をね」

二人で並んで歩きながら男子トイレの前まで移動すると、鈴はそこで立ち止まって僕だけが中を様子見する。トイレの中に誰も居ない事を確認すると鈴に手招きをした。何度となく繰り返して手慣れた順序なので、僕らの間には言葉も無く淡々と進行する。

小走り男子トイレに入る鈴の表情は肝試しに興じているかのように愉快だ。

僕と手を繋いでいつものように一番奥の個室に向かう途中、彼女はくすくす笑いながら小声で言う。

「やっぱり男子トイレ入るのってドキドキするね。何回来ても全然慣れないんだけど。」

女子として男子トイレに入る事への恥じらいはあつても、僕とトイレに行く抵抗感は無いようだ。同性の友達とトイレに行くのときほど変わらない感覚なのだろう。

鈴を先に個室に入れて、続けて僕が入ると後ろ手で鍵を締める。

鈴とこうして遊ぶ時はこの個室と決まっている。人気の無さと一番新しく綺麗なものも判断材料となった。何故か壁に貼られている剣道部募集のポスターも目印になっている。

鈴は無言でニヤニヤしながら挨拶代わりに唇を重ねてきた。僕もそれに応じる。静かなトイレに、ちゅ、ちゅ、ちゅ、とじゃれあうようなキスの音色が慎ましく響く。

「で、どうだったの？ 今朝の三つ葉ちゃんは」

「あゝ、うん。後でゆっくり話すよ」

「えゝ気になるじゃん。聞かせてよツツチーの甘くも切ない恋愛事情」

「放課後ね」

鈴は肘を折りたたんだまま両手を可愛らしく僕の肩に乗せる。僕の両手は彼女の臀部へと伸びた。

「ケチ。今日も可愛かった？ 三つ葉ちゃん」

「うん。可愛すぎて凄く緊張した。相変わらず喋るだけで心臓が口から飛び出そうになる」

唇を啄みあいながら僕がそう言う鈴が笑う。

「お昼休みに学校のトイレでキスするのは全然平常心なのにね」

「そりゃあ相手が鈴だし」

友達とトイレでキスをするのなんて、それこそ一緒にトイレに行くのと同じくらい当然の行為のように感じる。鈴も僕と同じ気持ちのようで、その感覚を共有出来ているのが殊更嬉しそうに口端を緩ませた。

「そりゃそうだ」

そして彼女は繋がった唇から舌をそっと差し込んでくる。

僕と鈴の日々は友情を深め続ける一方だった。そんな中で当初存在した、『恋人のようなキスをするのは避けよう』という不文律はいつの間にか意味を為さなくなっていた。

というのはいくら僕と鈴が『恋人のようなキス』や『恋人のようなセックス』を重ねても、僕達を繋ぐ友情という架け橋には何の影響もない事が判ってきたからだ。

今ではむしろ『恋人のような肉体接触』という概念に対し、僕らの関係性を崩せるのならやってみろと意志を見せつけるように身体を触れ合わせる。僕達が友達である事を証明する為の交接。深く考えた事は無かったが、アナルセックスをする事を決めたのもその一環なのだろう。

そういうわけで、僕達しか居ない男子トイレには、舌同士が唾液を塗り付けるような水音が響き渡る。くちゅくちゅ。れろれろ。

僕の両手は鈴のスカートをめくりあげて、その豊かな尻肉を鷲掴みにする。ぷりんとした弾力に指を食い込ませると、一生このまま揉んでいたいと思わせる触り心地に指が悦ぶ。

キスの音も桃尻の感触も卑猥極まりないし、実際スラックスの中では痛いくらい勃起しているが、それでも心臓の高鳴りは性的な高揚を起因としない。ただただ友達との昼休みを楽しんでいるだけだ。

一般的にはきつと三つ葉ちゃんより鈴を魅力的に思う男性が多いのだろう。それでも僕の心臓が恋の調べを鳴らすのは三つ葉ちゃんだけだった。それは鈴も一緒だ。彼女には堂島さんという素敵な彼氏が居て、彼女が本当に女としての顔を見せるのは彼だけだ。

その証左として、今も何の肩肘が張らない気安い笑みを僕に向ける。

「ツツチーさ、ペロチューめっちゃ上手になったね」

「そうなの？ 自分じゃわからないけど。でもしよっちゅうしてるから慣れてきたかも」

放課後に僕の部屋で遊ぶ時は言うまでもなく、掃除だったり体育の後片付けで二人きりになると、僕らは当たり前のようにキスをした。こうして昼休みにトイレで思いつきイチャつく事も珍しくない。まるで夜中の学校に忍び込むくらいの、ささやかな青春的一幕といった遊びだ。

「三つ葉ちゃんにいきなりこんなキスしちゃ駄目だよ？」

「いまだに三つ葉ちゃんとそういう関係になるのは高望みに思える」

「もー。普段はずつと無表情でぼっちでも全然気にする素振りもないのに、三つ葉ちゃんの事になると途端に弱気になるんだから」

「ずつと遠くから見ただけで満足だったんだからしょうがないだろ」

「確かにそつから挑戦しようと思気込んだだけマシだけど」

そう。僕は鈴のおかげで少しだけ変わった。そして三つ葉ちゃんはそんな僕に僅かばかりの興味を抱いてくれた。僕が変われたのだから、自分も変わるのかもしれないと。

付き合ったら何をするのか。その疑問もそこに繋がっているのかもしれない。

僕は鈴と深いキスをしながら、親友でもまだまだ知らないところがあると実感する。

にゆるにゆるとした舌の柔らかさ。暖かい唾液。歯茎を舐めた時の反応。今までは知らなかった。そして今日また一つ、彼女の新しい温もりを知る。そして僕もきつと何か変わるのだろう。

濃厚に、それでいてフレンドリーに舌を絡ませながら、手の平一杯で彼女の瑞々しい柔肉を堪能する。そこで僕はある事に気付いた。

「もしかしてTバック？」

「にしし。正解。ツツチーの好きな黒いレースのフリルがついたやつ」

「学校にTバック穿いてくるなんて不良だよ」

「あ、そういう事言っちゃおう？ じゃあ学校のトイレでおちんちん大きくしちゃうのはどうなんですかね」

鈴はくつくつ笑いながら右手で僕の股間を摩る。

「鈴が胸を押し付けてくるからだよ」

「ん〜？」

からかうようにニヤつきながら、両腕を首に回して抱き着いてくる。僕は背中を扉に預けた。さほど身長が変わらない為、ブラウスの上からでもわかる豊かな膨らみが僕の胸板でむにゅりと潰れる。

鼻先が触れ合う距離で鈴が囁くと、甘い吐息が鼻腔をくすぐった。

「ツッチーと友情深める記念日なんだから、朝から気合入れてみた。えへへ」

そうはにかむ彼女が何だか可愛らしくて、指が勝手に強く尻肉に食いこんだ。

「やん」

「ごめん。痛かった？」

「ううん大丈夫。好きに触って良いよ」

より強く抱き着くと、鼓膜をくすぐるように耳元で呟く。

「……ツッチーにならあたしの全部、放り投げて任せても良いからさ」

密着した胸で交換しあう鼓動は、お互いにただただ穏やかだった。安心と信頼だけが伝わるし、僕が返すのもそれだけだ。

静かな友情に浸っていると、二人分の足音がトイレに近づき、そして入ってきた。

僕と鈴は目配せをして、無言のまま笑い合った。

そつと唇を重ねる。二人で台風を過ぎ去るのをじっと待っているかのような連帯感。鈴は唇も胸もお尻も柔らかく、そして何より頭が眩むような良い匂いがする。きつと青春というものはこんな風に柔らかくも甘いものなのだろう。スラックスの中で息苦しそうな陰茎が、我慢汁で下着を滲ませている。

僕達が息を潜めて青い春を堪能していると、扉越しに用を足す二人組の男子生徒の声が聞こえる。どちらもクラスこそ違いが聞き覚えのある声だった。校内では人気のある軽音楽部の二人だ。

「昨日さ」

「おう」

「三組の鈴音真理でシコったわ」

「んなもん報告しなくていいつつうの」

「お前もあいつオカズにしてたって言ってる」

「そりゃ使うだろ。見てるだけでムラムラするわあんな。フェロモン撒き散らかしすぎだつつうの」

「あんなのと一回ヤリてーよな。土下座したらヤラせてくれねーかな」

「無理だろ。ああ見えて相当ガード堅いって話だし」

やがて二人が去っていく。僕は友達が好き勝手言われている事に不快感を覚えたが、少し複雑な感情も抱いた。

何より鈴の心情を慮った。彼女は誰に対しても分け隔てなく接するし、それはあくまで自然体で色目など使うはずもない。それでも彼女はこうしたって魅力的で、普通になっているだけでも男子からは性的な目で見られがちだった。彼女はそれを嫌悪するというよりかは、その所為で本当の男友達が出来ない事を残念がっていたのだ。

しかし僕の心配は杞憂に終わる。鈴が見せた笑顔は、強がりや虚勢を全く感じなかった。

「あたしでシコって良い男友達はツッチーだけだったの」

その晴れやかな笑みは本当に望んでいたものを手に入れた人間だけが咲かせる事の出来る表情だった。彼女は勇気を出して欲しいものを手に入れた。セックスをしながら恋愛相談も出来る、男も女も関係無いただの友達。

僕はそんな鈴を誇りに思い、そして勝手に諦めていた恋愛を掴もうと一歩進んだのだ。

「ていうかあたしらくらい仲良いとオナニーの見せ合いっこしちゃうしね」

そう。僕は時々向かい合ってオナニーをしあったりもする。基本的には僕は三つ葉ちゃんの、鈴は堂島さんの名前を口にしながら果てるが、お互いの名前を呼び合いながら達する事もある。

「ツッチーが三つ葉ちゃんの事を考えながらシコシコする時さ、普段の無表情が嘘みたいにな顔するじゃん？ あれめっちゃ好き。恋してんならっつて感じる」

ニコニコと屈託の無い笑みを浮かべながら唇を押し付けてくる。

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ。

「一人エッチの様子を改めて評価されると流石に恥ずかしいんだけど」

「あはは。ごめんごめん」

トイレは再び僕達二人きりの空間になる。右手を鈴の頬に添えると、僕の意図が伝わったのか、彼女はそその手の中指を口に含む。そしてフェラチオをするようにねぶり、指を唾液塗れにした。

「しっかり濡らしなよ」

僕の声を肯定するように、彼女の舌はねっとりと僕の指に巻き付いた。

潤滑油がしっかり纏った事を確認すると、右手を鈴の口から臀部に伸ばす。

「……ちゃんと今朝、綺麗にしてきたから」

鈴が恥ずかしそうにそう言った。

僕は左手で彼女の豊満な尻肉をぐいっと横に広げると、Tバックの脇から右手の中指で肛門を摩擦った。

「んっ」

「いれるよ？」

「……うん」

先程までの気さくな雰囲気はなりを潜め、鈴はどこかいじらしい上目遣いで頷いた。

そつと唇を重ねると、穏やかに舌を絡める。

にゆるんと中指が肛門から彼女の中に滑り込んだ。指の挿入は幾分か慣れたものの、まだ無垢なその穴による締め付けは相変わらず膣のそれとは一線を画す。幾多に折り重なった輪ゴムに指を締め付けられているようだ。

鈴は若干肩を強張らせて、キスをしながら薄目で僕を見た。僕はそんな彼女を安心させるように舌を吸い続ける。やがて彼女は全身を弛緩させるように瞼をとろんと落としていった。

そのまま指の出し入れをしながら、時々円を描くように肛門をほぐしていった。

「……んっ、ああ……」

鈴は悩まし気な吐息を漏らしながら顎を引くと、唇をきゅっつと結って僕を上目遣いで見る。

「……っつっ、ちい……」

「なに？」

「……ごめんね。こんな事の為にお昼休み呼び出しちゃって。でも念入りに準備しとかないと不安で」

「二人で気持ち良くなれるかどうかは僕にとっても大事な事だから」

鈴は照れくささと嬉しさで口元を緩ませる。

「今日の放課後さ、今指が入ってるその場所でツッチーと繋がるんだよね」

「うん」

「……そしたらさ、あたし達、もっともっと友達になれるね」

「うん」

舌の根本まで巻き付くような深いキスをしながら、指で彼女が僕を受け入れるようになるまで優しくかき混ぜる。

やがて鈴の腰がもじもじと揺れだし、内もみに垂れる愛液を確認した。

「壁に両手をつけて、腰をこっちにむけて」

鈴は潤んだ瞳で僕を見つめながら黙って頷き、そして指示通りの体勢を取った。

左手でスカートをまくってそれを彼女の背中中に押し付けて固定する。突き出した臀部は剥きタマゴのようにつるんとしていた。右手の中指を再びTバックの脇から肛門に挿入する。

「やっ、あ……」

「鈴のお尻の中、すごく暖かいよ」

「……言わないでよ。恥ずかしいってば」

「さっきオナニーの話された仕返しだから」

「意地悪……いつもの事だけどさ」

「もう少し脚開ける？ 両手の位置ももうちょっと下げて……そう。腰突き上げるように」

肩幅よりも大きめにハの字で脚を開かせると、中指をゆっくりと根本までいれる。

「あっ……く」

半分くらいまで引き抜く。

「んっ……」

もう一度根本まで押し込む。

「……はうっ」

それを続ける。にゆる、にゆる、にゆる、と膣口とは違う独特の摩擦音が鳴った。

「あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……」

鈴の背中が反っていく。

「……つつちー……人、来てないよね？」

「大丈夫。もし来てもその可愛い声を聞かせてあげればいいよ。鈴がお尻に指を入れられて、喘いじゃうような子だって皆に教えてあげよう」

「……鬼畜モード入ってない？」

「入ってない。そんなの入った事ない」

「この無表情系天然鬼畜め……」

手首のピストンを早めていく。

「……ちよ、ツッチー、マジで声ちゃうから……あっ、やっ……」

ただ指の出し入れに慣れさせるだけでなく、円を描いてぐにぐにと肛門をほぐす。

「それだめっ……うう……お尻広がる……」

「広げてほしいから僕を呼び出したんでしょ？」

「そう、だけど……言い方」

「違うの？」

「……………でた。得意の言葉責め」

「じゃあやめようか」

指を引き抜いていくと、第一関節のところを鈴が切なそうに言う。

「……お尻の穴でもツッチーとエッチしたいから、指であたしの肛門広げて下さい……ツッチーの大きいおちんちんが入るくらいに駄けておいて下さい……」

「いいよ」

「……ホントドS」

普通に手マンをするように手首を動かす。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

いつも通り鈴は濡れていく。愛液が太ももに糸を引いていく。両膝が折れて落ちていく腰を、僕はお尻の中から持ち上げる。

「ひゃうっ」

「一回イクまで立ってようね」

「……はい」

鈴の下腹部が疼いているのがわかる。ただでさえ締め付けのきつい肉穴は、僕の指を食いちぎらんとばかりだ。はたして本当に男性器を挿入出来るのかと思わざるをえない狭さ。

ともかく彼女の肛門は指なら啜えこむ事が出来るようになったし、そしてそれで果てるようになった。

「それじゃあイっていいから」

「……………うん」

鈴の両手がぎゅっと握られる。

「んっ、んっ、んっ、んっ♡」

「お尻の穴、ぎゅうぎゅうに締め付けてくるよ」

「やだ……言わないでって………あっ、やばい………イク………ああっ、くる………あっ、イク、あっあっ、イクっ、イクっ………あああっ♡」

びくんびくんと腰が痙攣する。愛液は黒のハイソックスを濡らすまで垂れていた。締め付けはもはや手首を動かす事すらままならない程に強い。肉の輪が指を捉えて離さない。

「鈴。指離してよ」

「……………今イってるから……無理……」

「もっとお尻を広げて欲しいの？」

「ちがっ、やっあ♡」

指を動かそうとすると肛門が吸い付いてくる。

「すごいエッチな穴になっちゃったね」

浅い息遣いの鈴が悔しそうに、それでいて愉快気と言う。

「……放課後、絶対にベッドの上でやり返してやるんだから」

「楽しみにしてるよ」

僕は淡々と返すと、家から持ち出してきたものをポケットから取り出す。

手の平に収まる程の黒い物体は、スペードの柄を模した玉ねぎのような形状をしていた。それは所謂ナルプラグというものだ。

鈴は少しだけ首を回してそれをちらりと見た。

「……それ入れるの？」

「もう何回も入れてるから大丈夫だよな？」

一緒に持ってきたローションをプラグに垂らしながら言う。

「変態みたいに言わないでよ。大体こんなところで入れた事なんてないし。ツッチーの部屋だけじゃん」

「一回入れたままコンビニに行ったでしょ」

「あの時もわざわざあたしをレジに行かせたよね？」

「凄い顔赤くなってたね。モジモジしながら何回も振り返ってきたし」

「ええ、ええ。いつもと変わらない親友のシラ〜とした顔をよく憶えていますよ」

「ほら、脚開いて」

ようやく指を引き抜けるようになる。

「んっ」

鈴の可憐な肛門はとたんにキュッと口を閉じた。そこにプラグの先端をあてがい、ゆっくりと押し込んでいく。

「……あうっ」

最も直径が広がる場所は指の比ではない。しかし鈴の肛門がにゅう、と柔らかく広がったかと思うと、そのまま滑り込むように彼女の中に埋没した。

あとは錨のような形をしている持ち手の部分が、鈴の陰部の曲線にぴったり沿って収まった。

「お疲れ様。ちゃんと入ったよ」

鈴は暫くその体勢のまま息を整えていた。僕はその時、彼女の愛液で濡れた太ももなんかを拭いてあげた。

そして鈴は振り返ると便座カバーを下ろしてその上に座る。

「座っても痛くない？」

「それは大丈夫。持ち手の曲線が思ったよりフィットしてるから。でもちょっと息苦しいかも。えへへ」僕を見上げるその笑みほどことなく頼りない。

「やっぱり抜こうか？」

「ううん。多分これくらい入念に準備しといた方が良いと思う。ツッチーの大きいし」

「そっか。まあしんどくなったら抜こうね。さて、教室戻ろうか」

踵を返そうとする僕の手を彼女が掴む。

彼女は便座カバーの上に腰を下ろしたまま、ニヤニヤと僕を見上げる。

「あたしのにやられっぱなしとかありえないんですけど？」

そして僕のベルトに手を掛けて、かちやかちやと脱がしていく。

「もうあんまり時間無いよ」

「あとどれくらい？」

「十分とちよっと、かな」

「余裕じゃん。あたしの本気フェラならツッチー瞬殺できるし」

僕のストラックスを下着と一緒に下ろす。

「それにほら、こんなおちんちんカチカチだと午後からの授業に集中できないっしょ？ ほら、もっとこっちおいで。口で抜いてあげる」

鈴の指摘に異論は無く、僕は一步踏み出してそそり立つ陰茎を彼女の目前に差し出した。

「昼食後のデザートにはちよつとイカついけど、いっただっきまーす……あむ」

鈴は一息に僕の亀頭を啞えこむと、両手を僕の腰に添えて首を前後に振った。

くっちゅ、くっちゅ、くっちゅ、くっちゅ。

艶やかな唇が陰茎を抜き、その口の温もりの中では舌が巻き付いてくる。

「うっ……」

引きつるように顎を引いて呻いてしまう。申告通り最初から本気のフェラだ。到底太刀打ちできない。

僕のセックスはその全てを鈴に教えてもらったと言っても過言ではない。なので一見僕が上位に立っているように見えても、全ては鈴の手の平の上に居るように感じる。

鈴が小休止と言わんばかりに口を一旦離す。肉槍は続けて鈴の口に慰めてもらいたくてビクビクと震えていた。彼女のフェラチオによる中毒性は男性器に渴望の勃起をさせる。

「どうどう。すぐにピュッピュッさせてあげるからねー。もうすぐだからねー」

子供もあやすような口調で亀頭にちゅつと唇を押し当てる。

そして可愛らしく舌なめずりしながら僕を見上げると、右手で陰茎を抜き出した。

「学校で我慢汁垂れるまでちんぼ勃起させるなんていけない事だと思いまーす」

先程の仕返しと言わんばかりにねっとり手コキをする。

彼女の唾液を潤滑油に、スベスベで暖かい手で摩擦させられると、あつという間に男根が燃えるように熱くなる。同時に限界まで膨張し、射精感が尿道を駆けあがっていく。

「鈴……そろそろ出そう」

鈴はニヤニヤしながら手つきをより粗暴にしていく。

「別に良ーけどさあ、このまま出しちゃったら制服がツッチーのザー汁でべとべとになっちゃうんですけど？ ただでさえツッチーの濃くて粘々なんだから」

そう言われても我慢など出来るはずもない。鈴の手の中で僕は痛みを覚える程に荒ぶっていた。鈴もわざとらしく驚嘆する。

「うーわ。ヤッバ。おちんちんパンパン過ぎでしょ。もうこれ精子出したくしょうがないやつだ？」

その後一瞬真顔で、「……マジででかすぎ。こんなの入るのかなあ」と苦笑いしていたが、主導権を握っているのは彼女だ。

僕は鈴の言う通り、もはや射精をさせていただだけの生き物になっていた。願いは鈴の体温で果てただけだ。それ以外の思考は何一つ纏まらない。

「……鈴……射精したい……」

そんな僕を見て鈴は満足したのか、絶頂直前の亀頭を再び啞える。右手は睾丸を優しく摩った。

「ひいよ……ほのままひっぱいらして……」

そう言うと、彼女はにゅるりと肉竿を呑み込んでいった。

それは紛れも無く性器への挿入だった。

「ううう！」

彼女の喉元で亀頭が破裂する。

びゅうっ、びゅうっ、びゆるるるっ！

断続的に噴火する僕の男根を啜えながらも、鈴はずっと僕を見上げながら睾丸を優しく撫でてくれた。それに答えるように腹の底から精液を注ぎ込んでいく。そしてその度に鈴は喉を鳴らして直接嚙下していった。

時折苦しように目を瞑ったりしていたが、それでも絶対に口は離さなかったし、睾丸への愛撫も止める事は無かった。

射精は長く続いたが、それが一段落すると鈴はゆっくりと口を離した。そして僕に見せつけるように口を開いてみせた。大半は直接喉に流し込んでいたはずなのに、それでも彼女の中は白濁液で溢れかえろうとしていた。

鈴が口を開き、そしてごくと喉を鳴らすと、再び口を開けて見せつける。もう彼女の口の中には何も残っていないかった。

「ツッチーの特濃カルピス、ごちになりました」

「お粗末様でした……」

鈴に精を吸い取られると、どっと身体が脱力する。背中を扉に預けて呆けていると、まだ七割程は勃起している陰茎の先端から白濁液が糸を引いて垂れた。

鈴は顔を僕の股間に近づけると、それを舌で掬うように受け止める。そしてそのまま肉竿を啜えると、優しく舌を這わせてちゅうちゅうと吸った。

「ああ……鈴……」

心まで溶かすような恍惚に膝が笑う。ずっと彼女に啜えられていたい。心からそう願っていると予鈴が鳴った。

僕らは少し名残惜しくも昼休みの余興を終える事にする。鈴は顔を離す時に何度か繰り返して亀頭にキスをしていたが、それは放課後の事を踏まえて挨拶しているかのように入念だった。

昼休みに口内射精を行う事は僕らの間では時折ある事で、その度に教室に戻るまでの途中の自販機でジュースを僕が奢るのが通例となっていた。今日はリングジュースで喉のいがいと精液の匂いを洗い流しながら鈴が言う。

「次って数学だっけ？ 今日ほどの授業も出席番号で指されるからテンション下がるわ」

「お尻にプラグを入れたまま積分を解く鈴の雄姿を楽しみにしてるよ」

「あはは。真顔で何言ってるの」

面白おかしように僕の背中を叩く鈴の歩き姿は、やはりどこかぎこちなく感じる。

「やっぱり歩きづらかったりする？」

「ん、歩きづらいついていうか違和感？ なんて言ったらいいかわかんないけど、とにかく変な感じ」

「しんどかったら外しなよ」

「苦痛って感じじゃないよ。どっかの誰かさんが今日に至るまで念入りに弄り続けてくれたおかげかな」

「お役に立てて何よりだよ」

「マジで猛特訓の日々だったもんね。来る日も来る日もツッチーに指を入れられてさ」

「特訓だなんて大袈裟な。エッチのついでの余興だったでしょ」

授業が始まる直前の廊下で、そんな会話を交わしつつ教室に戻る。

いつも通り鈴が先に教室に入る。視線は自然と彼女に集まる。

「真理……。どこ行つてたの？」

「ちよつとね」

あつという間に彼女を中心に輪が出来る。少し遅れて教室に入った僕に注目する生徒は一人も居ない。鈴だけが僕に視線をやり、こっそりと小さく手を振った。

この教室で彼女のお尻に性玩具が挟まっている事を知っているのは僕だけだった。指にはまだ彼女の肛門の窮屈さが残っている。それらはトイレでの遊びに加え、僕らの間で共通の秘密となる。僕らの関係がより親密になった気がした。

更には放課後、僕らはアナルセックスをする。クラスメイトに囲まれている鈴の様子は極めて気さくだ。しかし数時間後には僕にだけ可愛らしい表情と声を晒け出してくれる。それがほんの少し嬉しい。

この感情が三つ葉ちゃんの問いに対する答えに繋がるのかもしれないと考える。しかし鈴へのそれは違うものだろうと結論を出すには、さほど時間は要しなかった。

午後の授業が始まると、僕は時々鈴の方を見た。一見すると彼女の佇まいは自然そのものだ。頬杖をついて、退屈そうにペンを回している。

「ではこの問いの解法は……鈴音。鈴音真理。何になる？」

「微分系接触累乗型でーす」

教師から指されても飄々と答えていた。それでも僕と視線が合うと苦々しく笑い、『よくよく考えたらさ、なんだかあたし達つて変態みたいな事してない？』とメッセージを送ってきた。

『鈴は実際結構エッチだよ』

『は』つて何よ『は』つて。自分の事を棚にあげすぎでしょ』

彼女は度々僕の事を、まるで性的な好奇心に溢れている人間だと評する。しかしその評価は僕としては心外だった。

『僕は至って普通だと思っただけ』

鈴は机の下の携帯を眺めながら愉快気に笑みを浮かべると、メッセージと共にニヤニヤとした流し目を僕に送ってきた。

『どの口がそんな事言うんだか。ラブホでエッチする時つて絶対一回はあたしにフロントへ電話させながら腰振るよね？』

『普通じゃないの？』

『彼氏にはそんな事要求された事無いんですけど』

『僕は恋人でもなんでもないからね。関係性による相違じゃないかな。あとやっぱり僕としては鈴を虐めたというよりかは、鈴の可愛らしいところを他の人にも教えたいつて気持ちがあるんだよ』

『ああ言えばこう言うんだから。それにしても先週末のあれは人生で一番つてくらい恥ずかしかつたんだからね』

おどけた様子で唇を尖らせ睨んでくる鈴の視線を受けて、僕は先週末の記憶を手練り寄せる。

確か午前中からいつものラブホテルに行ったのだ。部屋に入つてすぐに服も脱がずに立ちバックで一回戦。僕が達した時は鈴の膝はガクガクと笑っていた。ベッドの上では全裸で騎乗位。笑顔で僕に反撃する彼女のグラインドは躍動感と艶めかしさに溢れていた。そして三回戦の前に一度休憩を取ろうとルームサービスの食事を注文した。しかし待つている間にお互い盛り上がってしまい繋がったのだ。

ソファで座位をしていると、呼び鈴が鳴ったものだから、立ちバックに移行してそのまま扉まで歩いて鈴に應對してもらったのだ。

ルームサービスを持ってきた従業員は僕らの親ほどの中年男性で、やや脂ぎった印象のある小柄な人だった。僕に後ろから突かれながら、快感と羞恥で耳まで真っ赤にする鈴の裸体を、食い入るように見ていた。その時の会話はまだ記憶に新しい。

「鈴。お礼を言わないと」

「……あ、ありがとうございます……ございます……あつ、ちょ、ツツチー、だめ……あつあつあつあつ♡ ごめんなさい、見ないで……あつ、イクっ♡ やだっ、イっちゃうっ……」

従業員の前で絶頂させられた鈴は、床に垂れる程太ももを愛液で濡らしていた。

その後彼女は無言のまま、僕が謝るまで絞る取るような弾効のフェラを続けたのは言うまでもない。

『何だかんで鈴ってああいうの好きじゃないか』

『そんなわけないし！ ていうか三つ葉ちゃんと付き合ったらあんな事したいの？』

僕はしばし考える。

『……いや、鈴は自慢の友達だから見てもらいたいわって気持ちがあるけど、三つ葉ちゃんだと独り占めしたいって思うかもしれない』

鈴はどこことなく嬉しそうに微笑んでいる。

『なんだかアンドロイドが愛に目覚めていく系の映画っぽいよね。最近のツツチー』

確かにそうかもしれない。鈴との問答でまた一つ自分の隠れた価値観に気付いた。彼女と交われば交わる程に、僕は自分を知り、そして変わっていく。

放課となると僕は静かに教室を後にした。僕の下校に気を留める者は居ない。鈴は多くの友人に囲まれている。いつも変わらぬ飾らない笑みは沢山の人を魅了し引き寄せる。その中には彼女に好色の視線を向ける男子も多いが、まさか彼女がこの後僕とアナルセックスをする予定だとは夢にも思わないだろう。

とはいえ僕もその事を取り立てて意識はしていない。そもそも友人との戯れの一つでしかないし、頭の中は三つ葉ちゃんの問いで一杯だった。恋人とは何ぞやと頭を捻らせながら校門を横切ると、道端に止まっている車の中から不意に声を掛けられた。

「やあ土屋君。お疲れ様」

声の主は堂島さんだった。鈴が付き合っている年上の男性で、コンパクトで可愛らしい外車が似合う洒落な大学生だ。鈴と堂島さんが並ぶとまるで俳優とアイドルのカップルみたいで絵になる。

「どうも。ご無沙汰してます」

「いつも真理と仲良くしてくれてありがとうね」

裏表を感じさせない爽やかな笑みはやはり鈴と似通っている。節々から大人の余裕を感じる堂島さんは、僕が憧れる理想の男性像でもあった。容貌からコミュニケーション能力まで全てに於いてかけ離れすぎているので、目標というには現実味が無い存在でもある。

「鈴ならまだ教室に居ましたよ。呼んできましようか？」

「いや、たまたま近くを通りかかっただけだから。何の約束もしてないし、自分もこれからバイトなんだよ」
安心感すら抱く丁寧で柔らかな物腰に、僕はついつい自分の疑問を口にしてしまった。

「あの。堂島さんにとって鈴って、恋人って何なんでしょうか」

あまりに脈絡のない質問に、堂島さんは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔を浮かべたが、僕を馬鹿にする事もなく思案に耽ってくれた。

「うーん。言語化は難しいね。一言で言えば大切な人だけど……多分土屋君が聞きたいのはそんな抽象的な言葉じゃないだろうし」

堂島さんは僕の顔を覗き込むと優しく微笑んだ。

「それにしても少し変わったね。土屋君」

確かに以前の僕なら、自分の疑問を軽々しく他人に投げかけたりはしなかっただろう。

「それは時々自分でも思います。きつと鈴の影響だと思います」

「前より良い顔するようになったよ」

彼にそう言われると何とも面映ゆい。途端に気恥ずかしくなってしまう。

「あれ。どー君何やってんの？」

そこに下校してきた鈴が顔を出した。期せずして恋人と出会えた彼女の笑顔は、年頃の乙女よろしく満面の花が咲いている。が、やはり挿入したままのプラグが気になるのか、そつと両手を回した腰はモジモジと揺れている。一旦顔を出してしまった手前、自然に振舞おうとしているらしい。

「たまたま通りかかったんだよ。それで土屋君に人生相談を受けてね」

「えー。何よツッチー。親友差し置いて水臭いじゃーん」

「鈴には後で聞こうと思ってたんだよ」

「で？ 何々？ ツッチーに何相談されたの？」

鈴は肩を堂島さんの身体になすりつける。同じような仕草を同性の友達や、僕にする事もあるが、やはりそれらとは一線を画す愛らしさが香る。何より頬を差す紅色はどこか甘酸っぱい。

堂島さんは一瞬僕に目配せした。言ってしまったても良いのかを配慮してくれたようだ。僕は黙って頷く。

「恋人とは何か、という哲学的な質問だよ」

鈴は殊更嬉しそうに、今度は僕を肘で小突いてきた。

「最近のツッチー、恋愛に超積極的だよ」

僕はただ三つ葉ちゃんの問いに応えたいだけだと反論したかったが、それ動機自体が恋愛に超積極的である事に気付いて口を噤んだ。

僕が黙り込むと堂島さんが大人びた雰囲気で冗談を言う。

「実際恋人が出来たら土屋君もわかると思うよ。なんなら鈴と一時間だけ恋人になってみるとか」

当然僕と鈴の関係を心から理解しているからこそ出る戯言だ。僕達は顔を見合わせたが、全く現実感はない。

「ツッチーと一時間限定で恋人かあ……うーん。カラオケ一回奢りで良いかな」

「そのお金があったら映画に行きたい」

「ひっど」

そんな風に言葉を交わして僕らを、堂島さんは弟妹を眺めるな表情で笑っていた。

その後堂島さんがバイトに向かうと、僕らもそれぞれの自宅に帰宅した。そこからそれほど時間は掛からずに、僕の部屋に鈴が訪れる。

「でも結構良いアイデアかもね」

「何が？」

ベッドの上で鈴と向かい合って座りながら、彼女のスカートを脱がしつつ聞き直した。

「だからあ。一日限定でもあたしと付き合うの。勿論ごっこでね」

僕のシャツのボタンを外しながらそう言う鈴は、何の気負いも無く言葉を続けた。

「したらツツチーが身を以って何かを掴みとれるかもしれないよ」

「鈴は良いの？」

「元々ツツチーの恋愛で背中押したのあたしじゃん？ 責任あるしさ、一肌脱いであげるよ」

「といっても元々そういうイメージプレイみたいな事は結構してるけどね」

鈴はセックス中に告白の練習をさせてくれる事が多い。ヘタレな僕でも性的に高揚している瞬間ならば、愛を囁けるのでそれを恒常化させようという試みだ。そして告白が成功するイメージを植え付ける為に、鈴もその申し出を受けるといふのがいつもの流れである。

「それは本当にエッチしてる時だけじゃん。そうじゃなくてちゃんと一日ずっと恋人になるの」

僕はまだ鈴のスカートを脱がせただけが、気が付くと僕は全裸にされていた。

ベッドの上でちゅっちゅとキスをしながら、既に勃起している男根を鈴の手で無造作に、それでいて優しく扱かれている。

「流石に堂島さんに悪い気がする」

「そのどー君が提案してきたんじゃない」

鈴は唇を親し気に押し付けてきながら、その口端に好奇心の塊である笑みを浮かべた。

「エッチと同じで遊びの延長だって。つうかさ、疑似でもガッツリ恋人関係経験するとか更に友達ポイント高まりそうじゃない？」

「うーん。それはどうなんだろう。兎に角とりあえずさ……」

「うん」

「先に鈴とアナルセックスしたい」

鈴はいじらしく顎を引く、やや上目遣いで頷く。

「……あたしもツツチーのおちんちん、お尻に入れられたい。それでツツチーともっと友達になりたい」

「僕も同じ気持ち。限定恋人になるかはそれから決めよう」

その頬に薄く紅を差した鈴はもう一度こくりと頷き、素早く唇を何度も啄んできた。

まるで打楽器を演奏するように繰り返して唇を衝突させつつ、僕はコンドームを装着する。

お互いもう勝手はわかっている。鈴は自ら四つん這いとなった。

僕はその背後につきながら問いかける。

「そういえば何で一回自分の家に帰ったの？ そのまま一緒にここに来れば良かったのに」

鈴の耳がほんのり赤くなる。

「……念入りにお尻綺麗にしてきたの。そういう事レディに言わせない」

突き上げた鈴のお尻は相変わらずTバックだったし、その細い布地からはアナルプラグも覗き見えた。

「自分で洗浄して、自分でプラグ入れてきたんだ」

鈴の耳が益々赤くなる。

「言わなくて良いってば！」

「いや律儀だなんて」



鈴はまだ不満を口にしようとしていたが、Tバックを下ろしてアナルプラグを抜くと、「んっ」と掠れた声と共に腰を揺らした。うぶな処女穴は一瞬ぱっくりと穴を開いたが、直ぐにキュツと口を閉じた。

僕はそこにローションを垂らすと、両手で臀部を掴んだ。鈴のしっとりとした肌は緊張と期待で汗ばんでいる。僕の肉竿は親友と新しく繋がる場所が出来た事を喜び、亀頭までガチガチに硬く勃起している。

照準を定める僕も、いつもと違う結合部の高さやや手間取る。しかしそこは阿吽の呼吸でカバーする。鈴と二人で協力して腰の位置や角度を微調整して、あとは押し込むだけの状態まで整えた。

見るからに男根を挿入するには手狭で、そして交わる為ではない器官での交接に躊躇を覚える。それでも僕は唯一の友人ともっと理解を深めたい一心腰を進める。

「鈴の事を、もっと知りたい」

肉の輪を穂先で押し広げながら、その思いが言葉となって漏れる。

「あたしもツツチーに知ってもらいたい。だから……入ってきて。誰も知らないあたしの場所」

鈴の肛門はふわふわな腫とは違い、ゴムのようなしつかりした弾力を有していた。他者との交わりを頑なに拒絶しようとするそれは、以前の僕を連想させた。だから尚更僕はそこに侵入したくなかった。人間関係が人を変化し、成長させてくれる事を鈴が教えてくれたから。

ぐっと腰に力を込めると、亀頭がにゅるんと肛門に呑み込まれる。

「んっ……」

鈴は全身を強張らせながら、両手でシーツを強く握った。僕はその特異な挿入感に頭が痺れる。

「鈴。友達になってくれて、ありがとう」

「こっちの台詞だし……ツツチーと友達になれてマジラッキーだった」

百合のその後

「……マジかよ」

百合は愕然としていた。

シヨッピングモールで一組の男女に絡んでいたチンピラを偶々見かけた俺と百合は、勇んでその仲裁に割って入った。

最初は二人だったのにどこに潜んでいたのか、ゴキブリのようにわらわら仲間が増えて俺達を囲んだ。俺も百合ももう随分と荒事には手を染めていない。少くないブランクがあった。

それに加え相手の中には躊躇なく刃物を手にする奴や、見るからに喧嘩慣れしている奴も居た。緊迫感で背中がひりついた事なんていつ振りだろうか。

この後遊馬と落ち合う約束がある。最悪百合だけでも五体満足で帰さないといけない。

期せずしてそんな気弱な考えが脳裏をよぎった。それくらい俺のアンテナは危険を察知していたのだ。しかし……。

「なんでそんな弱いんだよっ！」

俺らの周囲にはあつという間に死屍累々のチンピラが重なり、その傍らで百合が不満そうに地団駄を踏んでいる。

実戦を離れて久しぶりだった俺の目は、だいぶ曇ってしまっていたらしい。

「ほら、俺らもさっさとズラかるぞ」

「久しぶりの喧嘩だったのに！」

衆目が集まり始めたその場を駆け去りながら、不満で唇を尖らす百合の横顔に少し違和感を覚えた。

この見知らぬ街に出張ったのはただの享樂目的ではない。

百合の許嫁である遊馬からとある依頼があったのだ。その遊馬本人は、息を切らして待ち合わせ場所に現れた俺達の前で首を傾げていた。

「もしかして走ってここまで来たの？ 地元から数駅は離れているのに」

「そ、そんなわけ……ねーだろ……」

腰を曲げて膝に手をつき、息も絶え絶えに答える俺の横で、百合は無理矢理胸を張って虚勢を張る。

「最近運動不足だったし。たまには足腰鍛えねーとな」

彼氏の前で情けない姿は見せられないといった、百合特有の少しずれた恋愛観を發揮している。

「百合さん。流石です」

その相手である遊馬も敬愛の眼差しを向けている。俺が苦心して何とかくつつけた二人だが、その馬鹿ッブル加減は予想の斜め上をいっている。

「へっ。京助ってばこれくらいでへばってるし。なまりすぎだろ」

中腰になって息切れしている俺の肩に、馴れ馴れしく肘を置いて百合は得意満面の笑みを浮かべる。

「昔っからスタミナはアタシのが上だったんだよ。な？」

「知るか馬鹿」

相変わらず彼氏へのアピールの方向性が間違っている。指摘してやりたいが息は苦しいし、遊馬は遊馬でうんうんと感銘を受けているのもうどうでも良くなった。

「そんな真面目に百合の話聞かなくても良いぞ」

俺の言葉に遊馬は柔らかい笑みを浮かべる。

遊馬は頭が良いし何より懐が深い。百合の氣質を理解した上で合わせてあげているのだ。そんな器量だから俺も安心して百合を任せられる。

そんな事を考えている自分に思わず笑ってしまいそうになる。俺は百合の父兄でも何でもない。任せるだなんて馬鹿馬鹿しい。

しかし俺と百合が刻んだ青春の日々は確かに血よりも濃いものだったのだ。

それでもこれから遊馬と歩む未来は、そんな記憶が薄らぐ程幸福で染まっているに違いない。そうであつて欲しいと心から願っている。

「んで？ わざわざアタシらに遠出させたのはこの学校が原因なわけ？」

百合はもう虚勢を張るでもなく、けろりとした様子で遊馬に尋ねる。実際のところスタミナは勝てそうにない。筋肉の鎧は息切れを起こしやすいが、百合の洗練された肢体は一切の無駄が無い。燃費に優れた機能美の塊のような相棒だ。

「うん。ここの生徒会長とは懇意にしているね。それでとある相談を受けたんだけど……」

遊馬が向けた視線を追う。見慣れない校舎が建ち並んでいた。

「ここに退治して欲しい悪党どもが居るってか？」

百合が愉快気に鼻を鳴らす。

「お行儀良さそうな学校に見えるけどな」

俺のその言葉に百合は、「そんなの関係あるかよ」と笑った。生粹のお嬢様育ちである百合が口にする説得力がある言葉だ。昔から社交界では人の皮を被った魍魎魍魎の相手をしてきたのだろう。当の本人も美少女の皮を被った狼だが。

同じく育ちの良い遊馬が口を開いた。

「実際ここは品行方正な学校だね。暴力沙汰を起こすような生徒なんて、ここ十年は出ていないらしい」

「聞いた京助？ お前みたいな奴は居ないってさ」

くつくつと笑いながら俺を肘で小突く百合に無表情で返す。

「テメーにだけは言われたくなかったよ」

遊馬はそんな俺達の会話をニコニコと楽しそうに眺めながら説明を続ける。

「ただ最近少し事情が変わってきてるみたいだね」

両腕を胸の下で組んだ百合が、「ははーん」と何かに閃いていた。

「大人しい生徒達しかいないのの良い事に、ゴロツキに目を着けられたってパターン？」

「御明察です。百合さんは鋭いですね」

彼氏に褒められて百合は鼻高々になっている。若干頬も赤い。まるで恋愛を覚えたての少年、もとい少女のようだ。あの百合がよくもこんな乙女脳になったとしみじみ感慨に耽る。俺の努力も無駄ではなかった。

その字が表すように、まさに女の股に力を込める日々だった。しかし効果はあったのか、実際百合は俺に抱かれる事で、日に日に女として開花していったのだ。

「始末に負えないのは柄の悪い人間が現在では徒党を組んでるらしくてね。ちょっとした大所帯になりかけてるそうだ。勿論警察にも話をつけてあるらしいんだけど、向こうも巧妙で中々尻尾を出さないらしい」

「そういうのは早目早目に潰さねーとな。クスリの売買とか売春の斡旋にまで発展するのは目に見てるし」俺は素直に百合に同意した。一見非の打ちどころもない進学校が、ゴロツキに目を着けられて汚染される。

そういうケースは腐るほど見てきた。

「よっしゃ京助。早速そいつらぶつ潰しに行こうぜ。久しぶりだし燃えるな」

「あのなあ……遊馬がそんな事を俺らに頼むわけねーだろ。大方そういう集団に心当たりがあるかを聞いたいんじゃないの。蛇の道は蛇って言うしな」

「そう。京助の言う通り。さっきも言った僕の知人であるこの学校の生徒会長が欲しいのは腕つぶしじゃなくて情報。ちゃんと法に則って解決する」

遊馬はそう言い切ると、ニコニコしながら百合を改めて見つめた。

「百合さん。もう危ない事はしないって約束しましたよね？」

百合はバツが悪そうに顔を逸らす。

「うーす」

一見茶化した返事だったが、遊馬との約束は到底反故に出来ないという百合の胸中は察する事が出来た。

遊馬は満足そうに微笑むと、俺達に背中を向けて先導するように校門をくぐる。

「先方からは入校許可証を貰ってるんで早速行きましょうか」

あの狂犬で名を馳せた百合の手綱をしっかり握っている遊馬の背中はず分と大きく見えた。

俺はあくまで喧嘩の相棒として対等の関係を築いていたが、よくもまあ百合をコントロールしているなど感心すら覚える。遊馬は遊馬で羊の皮を被った賢人で、百合とは最高の夫婦になれるであろう事を確信させた。

必死に仲人を務めた俺はそれが嬉しい。

遊馬の背中を追いながら、こっそり百合に耳打ちする。

「おい。あの伝説の喧嘩屋がやけに素直じゃねーか」

「……まあ、約束したからな」

そう呟きながら頬を掻く百合の横顔はどこか照れ臭そうだし、何より幸せそうだった。俺の胸も暖かくなる。

「どうやったらお前をそんなしおらしく出来るかご指導願いたいね。しかしどういう流れでもう喧嘩しなきゃなんて約束させられたんだ？」

百合は真つすぐ前を向いたまま、自嘲するように頬を緩ませた。その頬は朱色に染まってる。

「……………べ、ベッドの上で」

「マジか」

百合は確かに被虐嗜好を秘めてはいるが、それでも一定のラインを超えないと普段通りの生意気で一筋縄のいかない喧嘩屋のままだ。確か遊馬は百合との性行為にまだ慣れていないような事を匂わしていたが。

百合は面映ゆそうに言う。

「……最近はお前が遅れを取るようになってきちゃったさ」

それは彼氏の男らしい成長を喜ぶ女の顔だった。一転して悪友としての笑みを俺に浮かべる。

「この前お前が上になってる時に責められまくって約束させられた。へへ」

百合が相手だと男同士で下ネタを話し合っているのと何ら変わらない

雰囲気だった。しかしただの悪友では沸かない感情もあった。

「なんかお前と遊馬のそういう話を聞くのは気持ち悪いな。家族のセックスを覗いたみたいつか」

「別にイイじゃん。惚気くらいさせろって」

当の遊馬のすぐ後ろで二人でコソコソ話す。

「つか遊馬も意外と雄なんだな」

百合は耳まで赤くしながらも、益々愉快そうに声を潜めて言う。

「アタシの彼氏舐めてたらやべーぞ？ もうガンッガンだから。ガンッガン」

「喘いでんのか？ あの狂犬が。ベッドで彼氏に可愛がられて」

俺の煽るような質問に百合は「へっへ」と照れ笑いを浮かべながらも馬鹿な会話に乗る。

「誰だよお前って自分でなるくらい媚びた声出すからな。遊馬にヤラれてる時のアタシ」

「マジかよ。気色悪っ」

「バッカお前、遊馬は『すごく可愛い』って言ってくれるし」

百合は遊馬の声真似をしながら軽く踊るように身悶えしてみせる。

「ガンガンに突き上げながらか？」

「そう。もうベッドが壊れんじゃねーのってくらい。ってうっせーよ馬鹿。セクハラすんな」

百合は満面の笑顔でノリツツコミをしてくる。遊馬との恋愛は絶対調のようだし、それをネタに相棒の俺と下世話な話に興じるのも心底楽しそうだ。

「良かったじゃねーか。お前ドMなんだし」

「全然ドMじゃねーし」

ケラケラ笑いながら俺を小突く。俺達の間には遠慮という概念は無い。百合はその調子のまま小声で言う。

「ま、どっかの誰かさん程はドSじゃねーから助かってるよ」

「ベッドの上だろうとそんなお前を虐める男居んのかよ。命知らずだな」

露骨に白々しくそう返す。

「だろ？ つかそいつのちんこ噛み千切ってやろうと思っただけだよ」

百合もニイっと犬歯を見せつけるように口角を持ち上げてみせた。

「お前が言うマジっばいからやめろ」

「くっくっく。ビビってんの？ どっかの誰かさん。つか簡単に牙が通らねーだろ。鉄みたいなちんこしてやがるくせに」

その後も遊馬の後ろを着いていきながら、お互いを小突き合いつつ馬鹿みたいな会話を交わした。久しぶりに大暴れが出来そうな百合はただただ上機嫌だった。

「……マジかよ」

百合は再び愕然としていた。

「これがグループのリーダー格と言われている二人です。被害に遭っているのはまだごく一部の生徒だけです。これがこれ以上は見過ごせません。何か知っている事があればお願いします」

遊馬に紹介されたこの学校の生徒会長が差し出した写真には、先程ショッピングモールで俺達がぶちのめした金髪とスキンヘッドが映っていた。

火種が既に鎮火していた事に意気消沈している百合の隣で、俺が事のいきさつを説明する。

「……というわけで、衆目の前で無様を晒したこいつらがこの辺で悪さをする事は無いと思うぞ」
百合のフォローをしてやるわけじゃないが、遊馬にもきちんと念を押す。

「言っとくが正当防衛だぜ。勿論俺達ではなかったが」

「わかってる。それにしてもまさか既に解決済みだったとはね。不死身のコンビには恐れ入るよ」
少しだけ誇らしげに遊馬は、知人の生徒会長に目配せしてみせた。

俺と百合は大袈裟なくらいにお礼を言われたが、百合は相変わらず不完全燃焼らしくずっとぶすつとしていた。余程暴れたかったらしい。

遊馬は先方ともう少し話す事があるらしく、俺と百合だけが会議室を出てその辺で待機する事になった。
渡り廊下のベンチに腰を掛けた百合は、つまらなそうに脚をぶらぶらと振る。

「面倒事にならなくて良かったじゃねーか。つうか今日のお前ちよっとおかしいぞ。そこまで血の気の多いキャラでも無かったろ」

肩を並べて座る百合は子供のように唇を尖らせた。

「だって久しぶりだったし」

「もう殴った蹴ったは卒業しろよ」

頬杖をついた百合は流し目で俺を見る。

「……京助さ、あの話忘れてね？ 今日『決戦』の日なんだけど」

前から百合と今日だと決めていた『決戦』。ただしそれは俺達の間では特別な事でもなんでもない。

「別に忘れてはねーけど。ただ誕生日を祝うよりもイベント感が薄くはある」

「アタシらお互いの誕生日祝った事なんてねーだろ」

「奢りでカラオケ行くくらいだな」

会話が途切れると、この学校の吹奏楽部の演奏が聞こえてくる。それを覆うように百合はため息をついた。
「その前哨戦が出来るかなって思ったんだよ」

「何だよそれ」

百合は俺に顔を向けるとニヤリと笑った。

「ウォーミングアップが必要だろ？ 空前絶後のバトルなんだから」

「馬鹿じゃねーの」

俺もつられて鼻で笑うと、百合はほんの少し寂しそうな表情を浮かべる。

「ま、京助と大立ち回りが出来るって期待してたからガツカリしたってのもあるけどさ」

「……さっきも言ったけど」

「わあってる。わかってるってば。殴った蹴ったは卒業だろ。遊馬とも約束したしな」

百合の気持ちはわかる。充実していた青春の残滓はまだ俺達の肌に残っていて、それは時々あの熱い日々を思い返させるのだ。それはどうしても俺達の若い血潮を滾らせる。

「……ったく。しょうがねーな。じゃあ前哨戦やるか？」

「はあ？ 誰とだよ」

「俺とだよ」

その言葉に百合は目を輝かせた。俺が黙って立ち上がり歩き出すと、軽い足取りで後ろをついてくる。
校舎に入り適当にうろつくと、やがて人気の少なそうな奥まった場所にトイレを見つけた。

「ちょっと待ってろ」

俺が中に人が居ないかを確認している間、百合は素直にトイレの前で待っていたが、その表情はやる気満々といった感じだ。仁王立ちで何度も繰り返し拳を己の手の平に叩きつけている。

「おら。入って来いよ」

初めて来た学校の、それも男子トイレだと言うのに、百合の表情と足取りは勇ましい。

百合を個室に招き入れるとすぐに扉を閉めた。

「つかかこのトイレ滅茶苦茶綺麗じゃね？ 殆ど新品なんか」

修学旅行で旅館を吟味する少年のようなはしゃぎっぷりである。

「何か知らんけど剣道部募集のポスター貼ってあるぞ。道場破りしてこいよ」

「馬鹿言えよ。もうお淑やかに生きるって彼氏と決めたからよ」

「どの口が言いやがる。さっきまで暴れたくてウズウズしてたくせに」

談笑もそこそこに、百合は腕を俺の首に巻き付けて抱き着いてくる。

「こういうの、結構ドキドキすんな？」

押し殺した百合の声からは、不完全燃焼で終わった『決戦』の前哨戦を取り戻せた喜びに溢れていた。

「流石に俺も初めて来た学校のトイレでした事はねーな」

ちゅっ、とジャブ代わりに唇を啄み合う。

「アタシなんて男子トイレだから余計に緊張するってえの」

「お前がそういうの気にする事に驚くんだが。用が足しなくなったら平気で男子トイレ使いそうだ」

「バーカ。こちとら花も恥じらうお嬢様学校に通ってんだよ」

クスクス笑いながら再び口元を近づけてくる。

先程のジャブで間合いを測った俺達は、今度は渾身のストレートと言わんばかりのキスをする。触れ合う前から口を軽く開いて、唇が繋がるや否やお互いの舌を投げ込む。

ゴングが鳴ると同時の乱打戦。舌がクチュクチュと巻き付く音は、トイレ前の廊下まで届きそうな程だ。

「んっ……ふう……」

百合の眉根が下がり、鼻からは切なそうな吐息が漏れる。抱き着く腕はいじらしい力が籠った。

俺は舌の攻勢を強めながら、百合の臀部をスカートの上からぎゅっと鷲掴みにする。百合は内股になり、口腔内の支配権を俺に明け渡す。

好き勝手に百合の舌や歯茎をなぶると、百合はたまらないといった様子で薄く目を開き、そしてすぐにロンと瞼を閉じた。

「なんだよ。もう反撃しないのか？」

「……うっせーよ。油断したらいつでも噛みついてやつからな」

威勢が良いのは語句だけで、その声色はどこか愛らしい。俺の舌を必死に吸う様も従順だ。

スカートのホックを外すと、百合の方から下肢をくねらせて脱ぐ。それをトイレの壁の上に掛ける為に顔を離すと、百合は耳まで赤くして恨めしそうな視線を俺に向けた。

スカートを掛けると百合の方から俺の襟元を掴んで引く。仕方ないのでキスをしてやると、百合の方から貪るように唇を吸ってきた。尻尾があればきつとブンブンと振っていただろう。

ショーツの上から陰部を触ると指の腹に水気を感じる。

「やる気満々だな」

百合は俺の唇を熱っぽく甘噛みしながら何か悪態をついたようだが、キスの方に比重を置きすぎて何を言っているのかは聞き取れなかった。

何も久しぶりの喧嘩で身体が火照っていたのは百合だけではなかった。半端なゴロツキを相手にして、不完全燃焼になっているのは俺も同じだった。

ちゅうちゅうと唇を吸い合いながら、不躰に言う。

「ケツこっち向ける。入れてやっから」

百合の全身がゾクゾクと喜色に震えたのが手に取るようにわかる。

「……そっちだつてやる気満々じゃねーか」

吐き捨てるように言いながらも、百合は扉に肘をついて、腰をこっちに突き上げる。

レースの下着を脱がさないままぐっと横に逸らして陰部を晒しながら言う。

「お前こんな下着持ってたっけ？」

陰唇をぐっしりと濡らす愛液を、肛門に塗りたくる。

「……アタシがどんな下着持ってたようが勝手だが」

そりゃそうだと思いますが俺は下半身を露出する。

「あくまで『決戦』の前哨戦だからな。こっち使うぞ」

百合が相棒の身体を欲して濡れたように、俺も百合の甘い香りや柔らかな肌で痛いほどに勃起していた。その穂先を肛門にあてがう。

「んっ」

百合はビクンと腰を揺らしながら可愛い声を上げると、続けて反抗的な口調で言う。

「……別に良いけどよ」

「どうせ今日も綺麗にできてんだろ？」

「なんだよどうせって」

「お前いつも俺と会う時、アナルセックスの準備欠かさないじゃん」

「……それは……んんっ……♡」

予告も無しに挿入する。並よりだいぶ太い俺の陰茎は、当然のように百合の肛門に呑み込まれる。その柔らかい広がり方は俺達の絆の深さを物語っていた。

百合は爪先をピンと伸ばし、背中を強張らせるように振り返らせながら口を開く。

「……そ、それは……京助が……いつもアタシのお尻にちんこ入れてくるからだろうが……」

「要らねえの？」

問いながら腰を前後させる。よく知らない学校のよく知らないトイレで、百合の尻肉がパシパシと小気味良い音を鳴らす。

「あっ、あっ、あっ」

「なあ？ どうなんだよ」

「い、いる、けど……」

「何が？」

「……だ、だから……京助のちんぽ……これからも肛門に入れて、欲しい……」

百合のむっちりとした桃尻を掴むと、根本まで押し込むように挿入する。

「やっ、あっ♡」

どれだけ俺の形を憶え込ませても、生意気な締め付けをしてくる肉の輪を竿の付け根部分で楽しむ。その窮屈さは処女さながらだが、俺は百合を愉しませる為に耳元で嘘を囁いてやる。

「すっかり俺専用のガバガバまんこになっちまったな」

「……うる、せえ……」

反抗的な物言いをしながらも、百合は太ももから肩までビクビクと悦んだ。

がつつり結合した状態で、短くも細かいストロークでガツガツと百合を責め立てる。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

「あんま声出すなって。誰が来るかしんねーぞ」

「だ、だって、京助が、やっ、激しっ……あっ♡♡ だめっ、だめっ、強すぎだって……♡」

「もっと気合入れろよ。まんこだけじゃなくて口まで緩くなってどうすんだ」

「……うう……くっそ」

百合は俺に負けたくない一心で全身を強張らせる。それでも彼女の身体は、肌は、そして穴は、どうしようもないほど柔らかい。

パンツ、パンツ、パンツ、パンツ！

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

「ほら、声漏れてるぞ」

「……こんなもん、我慢できっかよ……あっ、いつ、そこっ♡」

「肛門だけキツキツになってるし」

百合の膝がカクンと曲がると、ただでさえ狭苦しい肛門が、ぎゅう、と更に陰茎を抱擁してくる。

「……京、助……やばいっ……て……」

「見りゃわかるよ。いや、突っ込んでたらわかる、か」

「……イキ、そう……」

聞こえない振りをして突き上げる。

「あっあっあっ♡♡♡ イクイクっ、イック♡♡♡」

切羽詰まった声と共に、肉付きの良い臀部がぶるぶると震えた。

肛門が一際強く縮まると、呼吸するかのようにふわりと弛緩する。それを何度も繰り返す。

「いつもより早かったな」

百合はヒイヒイと声を荒げ、俺の問い掛けに反応する余裕は無かった。

百合の絶頂が収まる気配も無い内に、今度はゆっくりと長いストロークを試みせる。

「そんなにこの後の『決戦』に期待してんの？」

「はうっ……ああ……♡」

「この下着もさ、今日の為に用意したんだろ？」

ねっとりとした腰を引いて、カリで肛門を捲ってやる。

「あああっ♡」

百合は蕩けに蕩けきった声を上げて、トイレの扉に爪を立てた。

そして乱れた息遣いの中、普段通りの口調で言う。

「わ、わりーかよ……？ ずっと修羅場を共にして、命預け合った相棒と……子作りエッチするんだから、勝負下着で気合入れてくんのが普通だろうが……」

再びゆっくりと腰を引くと、百合の肛門が伸びるように吸い付いてくる。

「ううう……♡」

その特異な快感にヒクつきながらも百合は言葉が続ける。

「……唯一無二のダチの……最強のちんぽでガキ仕込まれるってんだから、テンション上がって喧嘩っ早くなっちまうだろ」

『決戦』俺と百合の妊娠交尾。

そこに男女の愛は無い。しかし俺と百合の間で散った火花は恋愛のそれとは比にならないくらいに過激で、そして色鮮やかだった。戦友として築いた純然たる俺達の信頼は、いつしか何かを遺したがる程に昇華していた。新しい下着を用意してまでこの日の為に備えてきた百合の気持ちに応える。

「今夜、しっかり孕ませてやつからな」

強固に膨張した陰茎に、肛門を押し広げられながら百合は再度絶頂した。

しなやかな背中を小刻みに痙攣しながらも、しおらしい声音で返事をする。

「……うん」

身体こそ性の違いがあるものの、心は漢同士で契りを交わす。

前哨戦の締めに対応しい派手なピストンを見せると、白桃めいた百合の臀部がバンバンと打ち鳴らされた。

「ひっ、いっ♡ いっいっ、ひっいっ、あっひっ♡ ひっ、ん♡」

獣のような腰の前後運動に、百合はひたすら絶頂に絶頂を重ねた。

「イってる♡ あたしの肛門、ずっとイってる、からっ……♡」

膝は自立が困難な程に震え、陰部はピチャピチャと潮を吹いて床を濡らしている。

「……もう許して……京助のちんぽには、勝てないって、わかってるから……」

誰より俺が認める強者である相棒を、屈服させた満足感と共に精液が鈴口をこじ開けそうになる。

「……京助の勃起ちんぽには、一生逆らわないから……だから……もう勘弁してください……」

陰茎が極限まで膨張すると同時に、百合の生意気な肛門も降参するように広がった。

百合がガクンと大きく腰を落とす。結合が解かれると同時に放たれた精液は、ビチャビチャと音を立てて百合の背中を白く染めていった。それは後頭部を超えて扉まで達する。

中腰になった百合はハアハアと息を乱しながら失禁していた。脚を伝った透明の液体が、トイレの床に広がっている。そんな百合を無理矢理立たせ、まだ射精の途中の肉槍を再び肛門にねじこむ。

「ほら、気合入れて最後までちゃんと受け止めるよ」

「わ、わあってる……ってば……」

根性だけで百合は立ち姿を維持し、肛門で俺の吐精を処理する。その胆力に感心すると益々精が溢れる。そんな俺達に対して、トイレの外から足音と共に掛かる声があった。

「京助ー？ ここかー？」

「お、おう。遊馬か」

「やっど見つけたよ。電話しても出ないから校内を風潰ししてたよ。百合さんは？」

「ちょ、ちょっとわかんねえな。ずっとここできばってたから」

「大丈夫か？ 薬貰ってこようか？」

「いや、そこまでじゃねえから。悪いな。もう少し待っていてくれ」

「そっか。百合さんもさつきから電話してるけど出てくれないんだよな。どこ居るんだろ」



扉のすぐ外で遊馬が百合に電話を掛け出す心配がした。

百合は失禁する程に昇り詰めながらも、すんでのところまで上着から携帯を取り出して電源を切った。流石は幾多の修羅場を乗り越えてきた猛者である。最後の最後で見せる気合が違うと感心する。

「あれ。今度は繋がらなくなったな」

俺は百合の温もりの中で精を放ちながら口を挟む。

「大方その辺で走り回ってたら落として壊しちゃったんじゃないか。野生の猿みたいなものだからな」
百合は無言の抗議とばかりに肉穴を締め付けるが、それは俺にとって快楽でしかない。

「ぐう」

心地良さによってうめき声と共に精液が搾り取られる。

「ん？ 大丈夫？」

「……いや、踏ん張りすぎて脚を攣っちゃっただけだ……」

そう言い訳している際にも百合の中でドクドクと射精を続けていたし、百合の太ももにも失禁が伝っていた。

「近くに居るなら良いけどね。さっきの話もあるし少し心配だな」

「……ん？ あのチンピラ共の事か？ それならもう解決しただろ」

「確かにこの近辺での悪事は控えるかもしれないけど、二人に直接報復する可能性は否定できないよ」

遊馬の心配は俺達にとって当然の展開すぎて考慮すらしていなかった。以前なら余裕で返り討ちにしていて、もうそんな荒事はなるべく避けたい。俺がそう考えていると百合がぼそりと呟く。

「……あんな半端なチンピラ共が扱う凶器より、余程凶悪なモノを突っ込まれてるけどな……」

声を出さずじゃねーと腰を押し込むと、尿道に残った精液が漏れて、百合は悩まし気に桃尻を揺らした。